

# 海の女達と乱れる話

satori

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ここは偉大なる航路にある小さな島だ。俺は何年か前、漁をしていたら嵐に見舞われここに流れ着いた。

ここには海賊もあまり来ないし、危険もなくいい島なのだが、問題があった。この島には女しかいないのだ。しかも全員好みじゃない。俺は童貞で、かなり理想が高い。あんな女達とはSEXする気にはならなかった。それにどうやら相手も同じのようだ。

俺は一度もSEXできないまま死んでしまう自分が簡単に想像できた。毎日毎日好みの女海賊の手配書でぬく日々。本当に彼女達に出会えたら、そう思っていた。

# 目次

泥棒猫編	1
悪魔の子編	8
泥棒猫&悪魔の子編	15
ヴァイオレット編	24
ゴーストプリンセス編	30
カリファ編	36
海軍剣士編	40
獄卒長編	45
砂漠の王女編	49
無敗の女編	54
レベッカ&ヴァイオレット編	58
九蛇の戦士編	66

## 泥棒猫編

ある日、珍しくこの町に船が来た。そのメンバーには、何度も手配書で抜いたことのある、泥棒猫ナミに悪魔の子ニコロビン、その他にも色んな女がのつていた。略奪しにきた感じじゃなかったから、町人達も快く迎え入れた。

噂通りの美人な上に、水着にホットパンツ、自分の身体を見せつけるような服装だ。俺は我慢できずナミの後をつけた。

俺は大分前に行商人から興味本位で買った媚薬試してみることにした。あんな美女とSEXできたら……そう考えるだけで興奮してきた。

「この島結構いい服あるって聞いたんだけど……服屋はどこかしら？」  
眩きながら歩いているナミの後ろから近寄り、ハンカチで口を塞ぐ。媚薬を嗅がせることに成功した。

「んっ！んん！ん……！はあ、はあ……あんた誰よ……！何を嗅がせたの！」  
すぐに取り押さえられて、すごい目つきで睨みつけてきた。絶世の美女とはいえ懸賞金1600万は伊達じゃない。すぐに謝ろう、殺される……！俺はそう思った。

恐ろしく早い土下座。当然だ。効くかどうかもわからない薬などあてにはできない。ナミだって海賊なのだ。怒らせてしまったらどうしようもない。

「ん……ま、まあ、素直に謝ったから許してあげる。ほら、顔あげなさい」  
《なに……変な気分……きつき嗅がされたやつのせい……？》

俺は泣きそうになりながら立ち上がった。しかし、ナミの身体を生でこんなに至近距离で見ているのだ。抑えられるはずもなく息子も立ち上がっていた。

「ちよつと……なに立たせてんのよ……！」《やば……こいつ結構おつきい……どうしよう……したい……♡絶対きつき嗅がされたやつをせいなのに……っ》

俺は必死で言い訳を考えたが、なにも思い浮かばなかった。終わっ

た。この時点で俺の頭から媚薬のことなどどうに消えていた。

「し、しようがないわね……」

しようがない……？許してもらえるのか……？

「どうせ帰ったら私のこと想像して1人でするんでしょ！しようがないから相手してあげるわよ！こっちきなさい！」

俺は頭の中がぐちゃぐちゃになっていた。あのナミがやらせてくれる？全く理解できなかった。

《そうか！あの媚薬だ！効いたんだ！俺はこれからナミとSEXできる！》

そう気づいてから俺の頭は一瞬で色欲で埋め尽くされた。

「誰もいないわよね……」《どうしよう、我慢できなくてこんなところに連れ込んだじゃった……でももう我慢できないし……》

全く人気のない路地裏に連れてこられた。まさかあのナミとSEXできるなんて……あのナミが我慢できない！と言わんばかりの表情で俺のズボンを脱がせている！最高だ！

「ああ……す……くつさあ……」

ナミは早くもハート目になりながら下着越しに俺のちんこの臭いを嗅いでいる。俺もだんだん緊張が性欲に負け始めた。

「ね、ずーっと私にしゃぶってほしかったんでしょ♡しゃぶっていいわよねっ？♡ねっ？♡」

ナミは俺に向かって愛らしすぎる上目遣いで聞いてきた。

当然YES。俺は頭を縦に振った。

「んじゃあ……♡いただきまますっ♡ん、じゅるるるっ♡」

下着も脱がせてから一気に根元まで啜え込んできた。

俺はあまりの快楽に後ろの壁にもたれかかった。そうしないと立っていられないのだ。必死に根元に力を入れて我慢する。

「んふっ♡じゅるっ♡れえ……♡」

激しくしゃぶっていたかと思えば長い舌で竿を舐め回す。経験が少ない俺にはとても耐えられない。

ガクガク腰を震えさせながら限界だと伝えても全く聞いてもらえない。

「だあめ♡葉盛ったのはあんたでしょ♡ちやんと責任取りなさい♡」

否定できない……実際、俺の望んだ展開だ。素直に受け入れよう。ナミは喋っている間にも俺のちんこを軽く揉んで刺激してくる。休む暇は一切ない。

「じゃあ続き♡はむう♡じゆるる♡ちゆ♡んふう♡ぐぼ、♡つ♡ぐぼ」

本当にやばい。毎日のようにオカズにしていた女が自分のちんこを必死になってしゃぶっている。こんなの耐えられるやつがいるだろうか。こうなったらもう好き勝手やるしかない。

ナミの後頭部を掴んで思いつき引き寄せる。喉奥まで無理矢理ちんこを押し込んでそのまま腰を前後に振る。

「んんうっ♡んふっ♡んっ♡」《すごっ♡奥の方まで入ってきてる♡くるひい♡けど……♡気持ちいい♡》

多少乱暴に腰を振っているせいでもう限界が近い。

もう無理だ。ナミの頭を思いつき引き寄せ、もう一度喉奥まで押し込む。

どびゅううっ♡どくっ♡どくどくっ♡

「んふううううっ♡おぶっ♡んぶうっ♡」《きたああ♡あつう……♡すっごい濃い♡どろどろで喉に絡みつくこの感じ……♡たまんない……♡》

ナミの口の中で思いつき射精した。夢のようだ。まだまだ萎えてはいないものの、疲れた。ゆっくり口から引き抜いて座り込んでしまった。

「んくっ♡んくっ♡ぷあ……♡濃いの出し過ぎ♡あんたすっごいわね……♡」《ホントにすっごい……♡私こいつのチンポの虜になっちゃいそう……♡》

はあっ、はあっ……

あのナミが俺のちんこをしゃぶっていたのだ。心臓が破裂しそうなほど興奮した。その疲労が一気に来てしまった。

「ねえ…♡あんたまだやれるでしょっ？♡SEX…‥‥シない？♡」  
もちろんしたいのだが体力が空っぽだ。まともにピストンなんてできないだろう。ナミとヤレルチャンス逃しかねないが、俺は首を横に振った。

しかし、下の方は全くまんぞくしていない。当然立つたままだし、俺の視線もおっぱい、お腹や太ももに釘付けだ。

「もう…仕方ないわね…ちよつと休憩ね♡」

胸を押し当てるように抱きついてきた。すごくいい匂いだ。柔らかい…

俺は抱きつくようにしつつ水着の後ろの紐に手を通して背中を撫でた。

「ん…‥♡脱がせたい？♡」

ナミはにやにやしながら聞いてきた。俺はドキドキしながらこくつと頷いた。

「しようがないな♡ほら♡」

ナミはくるつと後ろを向いて髪を退けて紐を解きやすいようにしてくれた。俺はゆつくりと紐を解いた。

はらりと緑の水着が落ちる。後ろを向いたままだから見えないが、ナミがこつちを向いたらあの美巨乳が目の前に…‥！さつきからドキドキが止まらない。心臓に悪いくらいだ。

「んふふっ♡見たい？♡私のおっぱい♡」

ナミがからかうような目でこちらを見てくる。バカにされている感じがするのに、何故だろう。ゾクゾクする。今にも押し倒して揉みしだきたい気持ちを抑えて縦に首を振る。

「ふふっ♡可愛い♡ほらっ♡」

くるつとこちらに向き直って手を退ける。大きく綺麗な胸がぷるんつと揺れた。俺のちんこはガチガチだ。今すぐ揉みたい！そのことで頭がいっぱいになった。

「ん？♡見てるだけで満足？♡好きなようにしていいのよ♡」

こちらが我慢の限界なのを見通すように自分でおっぱいを軽くもんで誘ってくる。当然耐えられるはずもなくナミの巨乳を鷲掴みに

した。

「んんっ♡」

ナミがぴくんつと震える。その姿が可愛くてますます興奮してきた。ゆっくり優しく揉んで感触を味わう。柔らかくてあったかくて、どこまでも指を飲み込んでしまいそうだ。

「んふ…♡もつと激しくしちゃってもいいのよ♡」

もつと激しく…ぐつと指に力を込め、強めに揉んでみる。心地いい。物欲しそうにしている乳首に吸い付いてみる。

「あんっ♡そうそう♡上手じゃない♡」

喘ぎ声が可愛すぎる。たまらない！ナミの顔を引き寄せて唇を重ねた。

「んっ♡ちゅ…♡れる…♡」《ん…♡以外と積極的♡》

あああ…やばい。ナミとディープキスしている。脳が溶けそうなほど幸せだ。

「んちゅ…♡ちゅう…♡あむ…♡」

ナミの舌に吸い付くようなキス。身体まで蕩けてしまいそうだ。俺は無意識にナミのくびれに手を回し、太ももにちんこを擦り付けていた。

「ん…♡ぶあ…♡元気になったかな？♡」

ナミは俺の体力が戻ったと思うと嬉しそうにっこり笑い、ホットパンツを脱ぎ捨てた。

「もうできるでしょう？♡あんたのしゃぶってたから…私のおまんこもうぐしよぐしよなのよ♡」

ナミはパンツ越しに指でくぱあ…と広げて見せつけてくる。俺のちんこは今までにないほどギンギンにそそり立った。理性など飛んでいき、ナミを強引に押し倒した。

「やんっ♡ちよつとからかいすぎちゃった？♡」

愛らしくいやらしい目で俺の目を見つめてくる。こんなことされて理性を保てる奴なんかいるわけがない。パンツをずらしてまんこに先っぽを擦り付ける。

「あんっ♡焦らさないで♡はやくちようだいっ♡」



ナミの方から腰を動かしてくる。下手に焦らすとこのまま射精してしまいそうだ。柔らかい太ももをぐつと掴んで思いつきり腰を突き出して一気に根元まで挿入。

「ああんっ♡きたああっ♡」

こんな瞬間をずつと夢見ていた。ナミと生でSEX！最高だ。肉ヒダがいやらしく絡みついてちんこを刺激してくる。なんだこの名器は…！俺は一心不乱に腰を振った。

「あんっ♡あっ♡きもちっ♡もつとっ♡もつとおっ♡」《軽くからかつてやろうと思つてたのに…♡すごいっ♡奥までガンガン突いてきてる♡》

息を荒げながら自分のちんこによがり狂うナミを見ていると興奮が止まらない。もうすぐにでも射精してしまいそうなのもあって、ちんこはより一層膨れ上がり、ナミを思いつきり抱きしめながら乱暴に腰を振る。

「あはっ♡すごいっ♡またおつきくなってるっ♡ああんっ♡」《まだおつきくなるのっ？♡そんなの無理っ♡イツ♡イツちゃうっ♡》

もう限界だ。俺はただでさえそんなに持つほうじゃない。ましてや相手はあのナミだ。耐えられるはずがない。

思いつきり腰を突き出し、子宮に押し当てる。

深く息を吸うとナミの髪の毛、汗の、愛液の匂いが広がる。全身でナミを味わいながら射精す。

びゅるるるっっ♡びゆくびゆくっ♡ぶびゅるるるっ♡

「あああああっ♡きたっ♡イクウウツ♡あ”あ”っ♡」《すごいっ♡ああっ♡しきゅーに躊躇いなく出されてるっ♡》

はあっはあっ…中にたっぷり注ぎ終わり、名残惜しいがゆっくり引き抜く。ナミはビクビク腰を震えさせながら俺を見つめながら言った。

「もお…♡思いつきり出してくれちゃって…♡おなかたぶたぶよ♡」  
《ああ…♡おなか熱い…♡孕んじやうかも…♡》

まだまだ俺のちんこはガチガチだ。それを見てナミも嬉しそうに

口角を上げた。

「まだできそうね…♡でもちよつとお預け♡ん…♡」

ナミはまんこを開いて俺の精液を出した。時々ごぼっ♡と音を立てながら。

俺はこんなに濃いのを出したのか…今まで1人でしていた時はこんなにかくさん出たことも、こんなに濃いのが出たこともなかった。やはり相手がナミだからか。

「ふふっ♡お疲れ様っ♡結構スッキリした♡ちよつとシヨツピングしてくるけど、一緒にいく?♡」

ナミはぱぱつと服を着ると立ち上がってそう言った。俺は流石に疲れていたから首を横に振った。

「そつか♡じゃあここにいて♡ちよつとしたら戻るから…そしたら続きしよ♡」

続き…:…考えただけでゾクゾクしてきた。

ナミに服屋の方向を教えらるるにつこり笑って礼を言っ歩いていった。俺はとりあえず服を着てから壁にもたれかかって目を瞑った。

さつきまでの光景が目には浮かぶ。全く休憩にならない…:

しかし次の瞬間、休憩どころではなくなった。建物の隙間から人影が見えたのだ。そう、誰あろうあのニコロビンの姿が。

## 悪魔の子編

ナミとやったばかりで疲れていたが、その疲労は一瞬で消えた。悪魔の子、ニコロビンの姿が見えたのだ。

こちらも噂通りの服装。服は胸元が大きく開いていて、長めのスカートから綺麗な脚がすらりと伸びている。

ナミで媚薬の効き目を実感していた俺は迷いなくハンカチに媚薬を付着させ、背後に忍び寄った。

音を立てないように慎重に忍び寄り、後ろからハンカチで口を塞ぐ。予定だった。

俺は心の底から驚愕した。壁から生えている謎の手が俺の腕を押さえていたのだ。聞いたことぐらいいはある。これがハナハナの実際の能力……ということとは……バレている

「ふふっ。そのくらい気付くわよ。私の得意分野だもの。」

ロビンはにつこりと笑いながら振り返った。俺は恐怖に震えていた。どんな経緯があったのかは知らないが、懸賞金8000万。ナミの5倍だ。しかも今回は媚薬を嗅がせていない。間違いない。殺される。そう思った。

「私に何か用かしら？ 穏やかに済む用じゃなさそうだけど。」

キツと目つきが鋭くなった。言い訳も思いつかない。とりあえず謝らなくては。

「これは何？ 睡眠薬かしら？」

俺のポケットから媚薬の瓶を取り出した。睡眠薬よりヤバいのが入っている。やってることはレイプみたいなものだ。謝りたくても体を固定されて身動きが取れない。

「ん……媚薬……もしかしてあなた、私とそういうことがしたいの？」  
バレた……ここで変に嘘をつくよりは正直に言ったほうがいいと思ひ、俺は縦に首を振った。

「そうなの。安心したわ。てつきり暗殺か何かかと思って。」

俺の体を固定していた腕が全て消えた。なぜだかはわからないが怒っていないかったようだ。

「シたいなら普通に誘ってくればいいのに…♡ちようど最近溜まってるのよ♡ふふっ♡」

え…？ロビンの目つきが変わった。雌の顔だ。媚薬は嗅がせていないのに、許された上にやらせてくれると言っている。俺は迷わず首を縦に振る。

「こつちへ来て♡相手してあげる♡」

ナミの時と同じように路地裏に連れ込まれた。海賊の女性はみんな路地裏でやるのか？

「ふふっ♡何がしたい？♡私の身体…好きなようにしていいのよ♡」

俺はごくつと唾を飲み込んだ。ロビンの身体…好きなように…あの胸も、まんこも、お尻も、脚もどこでも…息を吸う度にナミにはなかつたいやらしい大人の匂いがする…俺は腰に手を回して抱きつき、谷間に顔を埋めた。

「ん…♡おっぱいが好きなの？♡ふふっ♡可愛い♡」

ロビンは服のチャックを下ろして俺の顔を自分の胸に埋めさせた。いい匂いというか…エロい匂いだ。我慢できずにスカートに手を入れ、お尻を鷲掴みにした。

「あんっ♡積極的ね…♡」

ロビンはそう言う俺のちんこを服の上から優しく撫でてきた。思わずゾクゾクツツと身体を震わせてしまった。

「すっごくおっきい…♡硬くて熱くて…♡立派ね…♡ちゅっ♡」

ロビンは耳元で囁いた。ロビンの声がやたらにエロく聞こえる。耳に軽くキスされただけで身体を大きく震わせた。これが大人の女…ナミの可愛らしい感じとはまた違う…妖艶な魅力というやつか。

ロビンはしゃがんで俺のズボンとパンツを脱がして深く深呼吸した。

「んん…♡ザーメンくさい…♡あなた、さつきまで1人でしてたでしょ…♡」

匂いだけでちよつと前に射精したのがわかったらしい。だが俺はさつきまで1人でしていたわけではない。ナミとSEXしていた。が、ややこしくなるといけないので黙って頷いた。

「ん…♡れるろ…♡ちゅう…♡」

まるで飴のように俺のちんこを舐め回してくる。焦らされてる感じがして気持ちいい。ロビンの綺麗な髪を撫でてみた。

「んふ…♡じゅるるるっ♡ぐぽっ♡ぐぽっ♡」

突然根元まで咥え込んできた。さつきまで優しく舐めていたのに激しいフェラチオだ。すごく気持ちいい。

「んっ♡ふっ♡じゅるるっ♡」

今までに味わったことのない感覚がきた。恐らく、ロビンが能力を使ってタマを舌の上で転がしているのだ。何人もの女が一齐にタマを舌で弄んでいるかのような感覚。とんでもない快楽だ。

フェラもどんどん激しくなっていく。無理だ。耐えられない。思いつきり腰を突き出して喉奥まで押し込む。息を荒げながらロビンの喉まんこを犯す。

「んふっ♡んぶっ♡おぐっ♡」《あはあっ♡イイツ♡喉奥犯されてるっ♡もつとっ♡もつと奥までえっ♡》

口をすぼめてすごいバキュームで責めてくる。苦しそうな表情がたまらない…もう限界だ…！

びゅくうっっ♡どぶっ♡びゅーっっ♡

「んぶううっ♡おぼ♡んぶっ♡んくっ♡」《キタツ♡久々のザーメンツ♡どろどろでくるひい…♡おまんこキュンキュンしちゃうう…♡》

白目を剥いて喉で精液を受け止めるロビン…エロすぎる…一度ゆっくり引き抜いて呼吸を整える。

「んくう…♡ぷあ…♡すごい…♡こんなに濃いのがいっぱい…♡あなた…気に入ったわ♡」

ロビンは精液を飲み干して立ち上がる。服を全て脱ぎ捨てていやらしいお尻をこちらに向けた。

「さあ♡おまんこにもおちんぽちようだい♡もうぐしよぐしよなのお♡」

っーっとお愛液が太ももを伝う。ゾクゾクする。むにゅうっとお尻を驚掴みにする。

「あんっ♡私みたいならしないお尻はきれい？♡」

寧ろ逆だ。俺は首を横に降る。

「じ、じゃあ♡早くちんぽ♡ちんぽちようだいっ♡」

あのクールなロビンが愛液をダラダラ垂らしながら俺のちんぽにお尻を擦り付けてねだっている…エロい…さっきまでのクールでいやらしい大人な雰囲気とは違って完全にドスケベなメスだ。

まんこに狙いをつけ、腰を掴んで望み通りずんつと挿入。ナミのまんことは違って、締め付けはあまり強くないものの肉ヒダー1つが生きているかのように絡みついてくる。気持ちいい。

「んはああつ♡きたつ♡ちんぽきたつ♡突いてっ♡おまんこぐちやぐちやに犯してえっ♡」

なんてドスケベな女だ。エロすぎる。お尻を軽く叩いてみた。腰を打ち付ける度、手で叩く度に肉付きのいいお尻が波打ってエロい。

「はあんっ♡あつ♡やあんっ♡お尻はあつ♡」

お尻を叩くときゆんつと締め付けが強くなる。俺は驚いていた。あの一味の頭脳と謳われたロビンはマゾだったのだ。強めにお尻を叩き、ずんつと思いつきり子宮を突き上げる。

「あああんっ♡んあつ♡もつとっ♡もつとおまんこ犯してええっ♡」

ロビンは快楽に酔いしれながら喘いでいる。誰か来たらどうするつもりだ…そうは思うものの俺も気持ちよすぎて腰を止められない。ロビンの両腕を掴んで引つ張る。身体を反らせて子宮をえぐる。

「んお”お”っっ♡それぎもぢいっ♡ひっ♡ひぐっ♡お”お”お”

お”っ♡」

俺ももう限界だ。スパートをかけるようにペースを上げ、めちやくちやに犯す。

エロい尻に腰を打ち付け、思いつきり中にぶちまける。

「ひぎっ♡イツツ♡あああああつっ♡」《おほおおおっ♡イグツ♡イグツ♡久々に子宮に生ザーメンツ♡熱くつてぎもぢいっ♡》

あああ…気持ちいい…ナミに続きあのロビンにまで中出し…最高…このまま死んでも悔いはない。ちんこを引き抜いて壁にもたれかかった。ナミとやってからろくに休憩もしないままロビンともやったのだ。疲れて当然だ。

「はあああ…♡んん…♡すつつごく気持ちよかつたわ…♡ねえ♡まだできるわよね？♡よかつたら私達の島に来ない？♡」

ナミと同じように俺の精液をまんこからだしながら聞いてきた。

俺は一瞬耳を疑った。島？ロビン達は海賊のはずだ。住んでいる島なんてあるのだろうか。

「私達の島は女の子しかいなくて、みんな欲求不満なのよ♡時々レズプレイで発散はするけど…やっぱりみんなおちんぼがないと物足りないみたいなの♡」

なんてことだ。要するに女ヶ島ということらしい。そこに来てくれという。しかし、どんな子がいるのか確認しなくてはならない。俺はどんな子がいるのか聞いてみた。

「どんな子…？色んな子がいるわよ♡元政府の人、元海賊、元王族も…♡過去は敵同士だった人もいるけれど、今は一緒にやる仲よ♡」

元政府の女。聞いたことがある。政府には暗殺機関があつて、そこに美女がいると。世界のどこかに大監獄があつて、その獄卒長がえらい美女だと。

海賊は色んな子を知っている。海賊女帝ボアハンコック、ボニー海賊団のボニーちゃんとか…それに王族も聞いたことがある。どこかの国の王女が美女、という噂をいくつも。

「悪い話ではないはずよ♡貴方だつてやりたいでしょう？♡」

ロビンは妖艶な笑みを浮かべながら俺のちんこをつんつんして煽ってくる。断る理由もないし、行きたい。だが俺は単純に船に乗るのが怖いのだ。嵐がトラウマになつてしまったのだ。その事を伝える。

「大丈夫よ。実はナミもあの船に乗ってきたの。今はシヨッピングでもしてるんじゃないかしら。あの子がいれば嵐なんて心配いらんわ。」

実はこの島に来てるのは知つててきつきまでやってたなんて言えない…それにナミの航海術の腕を俺は知らない。だが、クルーのロビンが言うんだから間違いないだろう。俺は首を縦に振った。

そういえば元海賊、元政府、元王族…みんな海賊や政府を辞めたの

か…？

「決まりね♡じゃあすぐにも行きましようか？それとも…もう少しこの島で楽しんでいく？♡」

ロビンは問いかけながらぺろつと舌なめずりをした。エロい…やりたい…でも島にいる子達も気になる…俺が葛藤していると遠くから声が聞こえてきた。

「おーい！戻ってきたわよー！待っててくれた？」

ナミが戻ってきた…ロビンとやったことがバレたらマズインじゃ…急いで服を手取る。

「あら、ナミ。今ちようど呼ぼうと思ってたところなのよ。いい男を見つけてね、島に来てくれるって♡」

ロビンは下着も着ないまま恥ずかしげもなくナミに姿をあらわす。待て待て待て！まずいかもしれない。ロビンは俺とナミがSEXしたことを知らない。やってることは浮気みたいなものだ。あの2人に怒られる…悪くないかもしれない。

「あらロビン！服着てないってことは…その男、ヤっちゃった？♡実は私もいい男見つけてここで待ってて言ったんだけど…それで、この後もう一回する予定なんだけど4pしちゃう？♡」

「もしかしてその男って…この子かしら？」

ロビンが俺を指差す。心臓がバクバクいつている。

「ああ！あんた何してんのよ！ロビンともSEXしたわけ☒」

怒られた…ヤバイ。殺されるかもしれない。さっきまで有頂天だった俺はすぐ頭を下げた。

「私とする分の体力と精力残ってんでしようね！」

ん…？そっちか…。よかった。体力はないが精力なら有り余っている。というかその身体を前にして精力がなくなる奴はいないだろう…俺は縦に首を振る。

「ん、よかった。なら許すわ。で、どうするの？私達の島来る？」

それはもうロビンと話がついている。俺はすぐに頷いた。

「そっか。じゃあ今から行く？私はもう買い物もしたしここ出てもいいけど？」



「私も構わないわ。どうするの？」

俺は少し贅沢な頼みを2人に見てみた。2人はにっこり笑って承諾してくれた。…島を出るのは明日明後日辺りになりそうだ。

## 泥棒猫&悪魔の子編

俺はナミとロビンに贅沢な頼みをした。それは一晩2人としたいという内容。

2人はにつこり笑って受け入れてくれた。

ナミ「私達2人としたい？ふふっ♡いい度胸じゃない♡」

ロビン「ちゃんと2人共満足させてちょうだいね♡」

さっきの2人の言葉が蘇る。思い出すだけでゾクゾクする。あんな美女2人と3P：思わずにやにやしてしまう。とりあえず急いでホテルまで行き、部屋に入った。

ナミ「この島女の子しかいないからそういうホテルないのね。ここ普通のホテルじゃない。」

その通り。この島は女しかいないからラブホなどはないのだ。だが、このホテルは割といいホテルだ。決して隣の部屋まで声が聞こえたりはしないはずだ。まあこの2人ならそのくらい気にしなさそうだが：

ロビン「…で、どうするの？早速しちゃう？♡」

ナミ「ん♡するの？♡じゃあ早くしよっ♡」

2人はもう軽く服をはだけさせている。俺だつてそんなの見せられて我慢できる賢者じゃない。首を縦に振り、服を脱ぐ。

ナミ「路上じゃ流石にできないこととかあるもんね♡いっぱい気持ちよくしてあげるから覚悟しなさい♡」

ロビン「ふふっ♡じゃあ最初は…♡」

ロビンがいきなりベットへ押し倒して唇を重ねてきた。俺の腕に胸を押し当てながら舌を絡めてくる。

ナミ「じゃあ私はこっちなっ♡えいっ♡」

思わず声が漏れる。ナミはおっぱいで俺のちんこを挟んできた。パイズリだ。ナミのパイズリ…何度その妄想で抜いたことだろう。気持ちいい。

ロビン「んふっ♡ちゅっ♡れる…♡」

ナミ「ほらほらっ♡あんたおっぱい好きでしょっ？♡どお？♡私の

パイズリは♡」

ロビンの頭を撫でながらナミのパイズリを味わう。やばい。ナミのパイズリだけでも堪えるのに精一杯なのにロビンの長い舌が俺の口の中を蹂躪してくる。俺は女のようにシーツを握って必死で堪える。

ロビン「んちゅっ♡はぷ♡ちゅう♡」《気持ち良さそうな顔：♡可愛  
い…♡》

ナミ「んっ♡はっ♡ちゅっ♡」《おちんぽすっごいビクビクしてる：♡もつといじめちやお♡》

ロビンは俺の乳首を弄り始め、ナミは亀頭をぴちやぴちやいらしい音を立てながら舐め始めた。本当にやばい。2人同士は流石に調子に乗ったかもしれない。

俺はロビンの腰に手を回し、胸を乱暴に揉みしだいた。舌も激しく絡める。少しでも気を紛らわさないと一瞬でイカされる。

ロビン「んふっ♡んっ♡んあっ♡」《やんっ♡おっぱい気持ちいい♡キスも激しくなつて…イイ♡》

ナミ「んふふっ♡いきそうなのわかってんだからねっ♡ほらっ♡いっちやいなさいっ♡」

ナミはぎゅううっ♡と胸を寄せてちんこにより一層圧をかけて上下に動いた。柔らかいのに激しくって気持ちいい…限界だっ

びゅぐっっ♡びゆるるるるっ♡♡  
ナミ「やあんっ♡あっ♡あんっ♡」《すっごい出てる…♡やばあ…♡どろっどろ…♡ん…♡美味し…♡》

ロビン「んふっ♡んぷあ…♡ナミのパイズリは気持ちよかった？♡私のキスも上手かったでしょう？♡」

ナミ「ロビン♡すっごい出たわよ♡しかも濃い♡ちよつと飲んでみる？♡」

ロビン「ええ♡ん…♡ちゅ♡」

ナミ「ん♡ちゅっ♡ちゅぱ♡れろ♡」

ナミは口に軽く俺の精液を貯めてからロビンとティープキスをした。あんな美女2人が目の前でティープキス…めちやくちや興奮す

る。

ナミ「ぶあ…♡どお？♡すつごいでしょ♡」

ロビン「ん…♡んくっ♡ああ…♡喉に絡みついて…いいわあ…♡」

2人が少し離れると俺の精液が2人の胸の間で糸を引く。エロすぎる。

ナミ「じゃあ次はロビンの番ね♡ロビンのフェラはすつごいわよ♡」

ロビン「ふふっ♡さつき路上でやった時とは段違いに気持ちいいわよ♡」

俺は内心びびっていた。さつき路上でやった時でも腰が抜けるほど気持ちよかったのにあれと段違い…？失神するんじゃないだろうか。

ナミ「私は一回手を出さないであげる♡ロビンのフェラを思いつきり堪能しなさい♡」

ロビン「じゃあ…行くわよ♡はあ♡ちゅむ♡れろ…♡」

ロビンはゆっくり竿を舐め始めた。もうこの時点で気持ちいい。だがさつきと段違いというほどじゃない。俺は少し気を抜いてしまった。

ナミ「ほら♡私の身体好きにしなさい♡余裕があればだけど♡」

ロビン「んふっ♡じゅるるるっ♡ぐぼっ♡ぐぼっ♡れろれろっ♡」

俺は思わず腰をぐんつと震えさせた。そうだ。ロビンはハナハナの実の能力者。舌だって好きに生やせる。ロビンは自分の口の中に何本もの舌を生やし、俺のちんこを舐め回しつつ、亀頭に激しく吸い付いている。こんなの無理だ。気持ちよすぎる。

ナミ「あはっ♡やっぱ無理かあ♡ロビンのフェラやばいでしょ♡」

ロビン「んふう…♡れえ…♡ちゅぼっ♡じゅるっ♡」

このままだとあっさりいかされる。それは癪だ。体を起こしロビンの頭を押さえ込む。ロビンの頭をオナホのように好き勝手動かす。

ロビン「んぐっ♡んふっ♡じゅるっ♡ずずずっ♡れろっ♡」

ロビンは少し苦しそうにしながらも掌に舌を生やし、タマを舌の上

で転がす。溶けそうだ。もう限界…

どくんっつ♡びゆくっ♡どぶっ♡

ロビン「んふううっ♡じゆるっ♡ぐぶっ♡」《あああ…♡熱いのが  
いっぱい…♡すごい…♡》

とんでもない快樂だ。出した後の精液まみれのちんこも丁寧にお  
掃除してくれている。

ロビン「んふっ♡ちゅっ♡れえ♡」

ロビンは俺のちんこを丁寧に舐め回しながら自分の体を生やして  
俺に抱きついて濃厚なキスをしてきた。気持ちいい…俺はロビンの  
胸を揉みながら快樂に酔いしれた。

ナミ「もお〜！ロビンばかりずるい！私だっけしたいっ♡」

ロビン「うふふっ♡じゃあ一緒に味わいましよう？♡ちゅっ♡」

ナミとロビンはお互いの胸を押し当て合うように俺のちんこを挟  
み込んだ。最高だ…ナミとロビンのWパイズリ…分身のロビンの上  
手すぎるキスだけで脳が溶けそうだ。俺は分身ロビンの胸やお尻、太  
ももを撫でまわす。

ナミ「んふふっ♡どお？♡私とロビンのパイズリは♡夢みたいで  
しょ♡んっ♡あっ♡」

ロビン「はっ♡ああっ♡おちんぽ♡今出したばかりなのに♡ガチ  
ガチであっうい♡ちゅっ♡はぶっ♡」

2人が競うように亀頭を舐め回す。俺の精液と2人の唾液をロー  
ションがわりににちゅにちゅ音を立てながら刺激してくる。長く持  
つはずがない…

どぶっつ♡どびゅっ♡♡びゅーっつ♡

ナミ「ああんっ♡ザーメンあっうっ♡」

ロビン「あっ♡すごいっ♡おっぱいいっぱい熱いのがあっ♡」

SEXする前から3発も搾られた…気持ちよすぎる…俺はロビン  
の分身を強く抱きしめながら匂いを嗅ぐ。いい匂いだ…

ナミ「まだまだ出せるでしょ？♡」

ロビン「じゃあ次は…♡」

「どっちとSEXしたい？」

2人とも顔を近づけて聞いてくる。ナミの若いキツイまんこもロビンのいやらしい雌まんこもどっちも最高に気持ちいい。どっちか選べなんて…

「悩んだ末俺は体を起こしナミを指名した。」

ナミ「やつたつ♡おつさきい♡」

ロビン「もう…♡仕方ないわね♡」

俺はナミにお尻を向けるように言った。綺麗で柔らかい突きがいのある尻だ。後ろからゆつくり撫でまわす。

ナミ「んもお♡焦らさないで♡早くおちんぽちようだい♡」

ナミはお尻を振ってちんこをねだってくる。可愛い。俺はまんこにちんこを当て、腰を突き出す。

ナミ「あつ♡はああつ♡きたああつ♡んっ♡はあつ♡」

締め付けがキツイ…気持ちいい。俺はナミの腰を掴んでお尻に思いきり腰を打ち付ける。尻肉が波打ってエロい。

ナミ「あつ♡はあつ♡んはあつ♡」

ロビン「ねえ♡私も忘れないでよ…♡ちゅっ♡」

ナミが可愛い声で喘ぎ、ロビンが恋人のようなキスをしてくる。やつぱり3P頼んでよかった。俺はますます興奮して激しく腰を振る。

ナミ「やつ♡そんなに激しくっ♡あつ♡いつ…ちやつ…あ”あ”あ”っ♡♡」

ロビン「ちゅう…♡ペろ…♡じゅる…♡」

ロビンのキスもどんどん激しくなっていく。ナミはもういきそうようだ。俺もだ。ナミとロビンと3P。長く持つはずがない。だがナミのもっと限界に近い喘ぎ声が聞きたい。その一心で必死にこらえて子宮を突き立てる。

ナミ「んんああつ♡らめっ♡イギツ♡あ”っ…♡ぐうっ♡ふーっ♡ふーっ♡」

ロビン「んふふ…♡じゅるるるっ♡じゅぶっ♡ぐぶっ♡」

ロビンは俺の舌をちんこのようにしゃぶる。舌フェラというやつか…気を失いそうなほど気持ちいい。ナミも必死にいきそうなのを

こらえているようだ。可愛い。俺ももう限界だ。イクツ…

どくんっどくんっ♡♡びゆるるるるっ♡びゅーっ♡

ナミ「あゝあゝあゝあゝ♡はっ♡はっ♡ひぎいっ♡くくくく!!!」

ナミの細いお腹に思いつきり精液を流し込む。ナミも胸を反らせていっている。可愛い。最後に1突き。ずんつと強く突く。

ナミ「おゝおっ♡はあっ♡はっ♡はっ♡ん…♡くうう…♡」

ロビン「ふふっ♡随分派手にいったわね♡ナミ♡」

ナミのあんな声が聞けるなんて…このまま別れたら1ヶ月はオカズに困らないだろう。ゆつくりちんこを引き抜くとごぼっ♡と音を立ててナミのまんこから精液が溢れる。

ナミ「あああ…♡すっごい…♡」《こんなにイっちゃったの久しぶり…♡きもちい…♡お腹あつたかあ…♡》

ロビン「さあ♡次は私の番よ♡どんな体制がいい？♡好きなように犯して♡」

ロビンは自分のまんこをくちゆくちゆ弄りながら聞いてくる。ロビンは普通に正常位で頼んだ。

ロビン「うふふっ♡わかつたわ♡さあ♡私のおまんこでいっぱい気持ちよくなって♡」

ロビンはまた分身を生やして後ろから抱きついてくる。おっぱいが当たって興奮する。ロビンの腰を掴んで一気に挿れる。

ロビン「あはああっ♡あっ♡ちんぽきたっ♡きてっ♡いっぱい突いてええっ♡」

挿れただけでにゆるにゆる絡みついてくる。俺は夢中で腰を振る。

ロビン「あっ♡はっ♡あううっ♡ううっ♡はあっ♡」

ロビンは気持ち良さそうに喘ぎながら分身で俺の身体を撫でまわしてくる。乳首を弄り、後ろから胸を押し当ててくる。興奮が抑えられない。

ロビン「ああっ♡んっ♡んああっ♡きもち♡いいっ♡もっとおまんこっ♡ずぼずぼしてええっ♡」

なんて淫乱な女だ。自分から腰をくねらせてくる。俺も出そうなのを抑えながら応えるように激しく突く。

ロビン「あはっ♡深いいつ♡あ”っ♡イツ…♡んはああっ♡」  
ロビンが舌を出して喘いでいる。手配書の顔とは大違いだ。エロい…俺は生唾を飲み込み、望み通りめちやくちやに犯した。

ロビン「あっ♡すっごいつ♡イイのおっ♡じゅぽじゅぽすきっ♡  
ああっ♡気持ちいいいつ♡」

俺は必死に我慢して腰を振った。だが長くは持たない…スパートをかけるようにペースを上げる。

ロビン「ああっ♡イツ♡あああっ♡すっごいのキチャううっ♡イク♡  
イクツ♡イクウウウツツ♡♡」

ロビンの分身も乳首をぎゅっとなでいかせにかかってくる。俺も…もう…イク…子宮をえぐるように突き上げ、望み通り思いつきり中出し。

びゅぐっ♡びゅぐ♡びゅるるるっ♡

ロビン「あ”ああっ♡ひぎゅっ♡う…♡あ”あ”あ”あ”あ”あ”

♡♡「《あはああ…♡気持ちいい…♡お腹♡ザーメンでいっぱい…♡》  
ナミ「はあ…♡はあ…♡んう…♡なに2人だけで楽しんでんのよ…♡  
私にも…♡もつとちようだい…♡」《あああ…♡もつと♡もつとち  
んぽほしい♡ザーメンいっぱいほしい♡…♡》

ナミも目が覚めたようで引き抜いたばかりのちんこを握って舐めてくる。途切れることのない快楽。もう無理などと言ってられない。

ナミ「はあ…♡ん…♡れろろろ…♡ちゅ…♡」

ロビン「んはあ…♡私にも…♡ちゅう…♡もっほ…♡ちんほお…♡」

ロビンもまんこから精液を垂らしながら舐め始めた。分身も耳や乳首などを舐めてくる。出したばかりでこんなことされて我慢出来るやつはいない。

ナミ「んふっ♡んっ♡ちんほ♡おいひい♡」《ああ♡こいつのちんぽ  
好き♡ずっとしやぶってた…♡雄くさあ…♡》

ロビン「んちゅう…♡れるれるっ♡んふう♡」《んん…♡ザーメンの  
匂い…♡癖になるう…♡》

2人とも自分の胸やまんこを弄りながら奉仕してくれる。絶景だ。



俺は2人に口を開けて舌を出してこつちを見るように指示する。

ナミ「んあ…♡いきそお…?♡ザーマンひょうらい…♡」《早く♡早くこいつのザーマンほしい♡いっぱい♡いっぱいぶっかけてっ♡》

ロビン「んあ…♡イツて♡私達にいっぱいぶっかけてえ♡」《ザーマン♡ザーマン♡臭くてあついの♡はやくう♡》

指示通りしてくれた。2人の喘ぎ声を思い浮かべ、眼前のエロい顔に向かって出す…!

びゅるっっ!♡びゅくびゅくっっ♡どぴゅっ♡

ナミ「ああんっ♡きたっ♡あついの♡」《きたきたっ♡ザーマンっ♡んんっ♡おいひい♡》

ロビン「んはああっ♡んっ♡んんっ♡」《はああ♡もう顔がザーマンでどろどろ…♡きもちいい…♡》

こんな美女2人に好き放題できるなんて…最高だ。まだまだ性欲は治らない。

ナミ「あはっ♡まだ全然おつきいままね♡」

ロビン「夜は長いわよ♡次はなにをする?♡」

俺は覚悟を決めた。朝まで夜通し中出ししまくってやる…!

そして夜が明けた。

ナミ「はあ♡はあ…♡うん…♡満足♡」《すごかったあ…♡何回もいかされちゃった…♡》

ロビン「私も…♡満足したわ…♡」《もう全身どろどろ…♡気持ちよかった…♡》

2人とも全身精液まみれにしてやった。とはいえ俺も限界だ。だが今日、ますます多くの美女が待つ島へ出発する。毎日こんな生活ができると思うと嬉しくも少し不安になった。

もう一番だけ…という気持ちを抑えて用意をする。特に手荷物もないが。

2人も服を着て用意を済ませ、船へ向かう。

ナミ「私とロビンと同時にシて両方満足させるなんてやるじゃない

♡  
「ロビン「ええ♡すごかったわよ♡船でも頑張つてちょうだいね♡」  
俺は少し驚いて船でも?」と2人に聞き返した。

ナミ「あたり前じゃない♡私達は一旦いいけど、あと1人すつごい淫乱なのがいるからね♡相手してあげて♡」

♡  
ロビン「彼女もすごいわよ♡能力はHに役立つものじゃないけれど

♡  
2人ともにつこりしながら言う。どんな人だろう…名前を知りたい。また2人に聞いてみる。

♡  
ナミ「名前はヴァイオレット。元はドレスローザの王家らしいわよ

♡  
ヴァイオレット…聞いたことがある名前だ。確か大分前に世界会議の時の新聞に載っていた。すごく美人でエロい身体をしていた。ナミかロビンで言えばロビンに近いだろう。彼女も2人の島の住人なのか…

途端に性欲が溢れてきた。ヴァイオレットとSEXしたい…

ナミ「あはっ♡勃つてきちゃった?♡」

ナミが服の上からちんこをつついてからかってくる。

ロビン「うふふっ♡大丈夫よ♡船について出港したらすぐ向こうから誘ってくると思うわ♡」

2人の言葉を信じ、俺はドキドキしながら船へ向かった。

## ヴァイオレット編

ドレスローザ王家の次女ヴァイオレット。彼女もまたかなりの淫乱だと言う。

新聞で一度見たことのあるあの身体、美しい顔を思い浮かべながら、今すぐにもやりたい…そう考えていた。

ムラムラした気分のまま船に着いた。ヴァイオレットの姿はまだ見えない。

そのまま船へ乗り込む。

ナミ「とりあえず出港ね。この辺の気候は安定していいわ。」

ロビン「じゃああなたはヴァイオレットと楽しんできなさい♡あつちから誘ってこなくても頼めばやらせてくれるはずよ♡」

俺は領き、ヴァイオレットを探す。どこがどの部屋だかも案内されてないのにとりあえず乗員の美女とSEXなんてよく考えたらめちやくちやだ。

いろんな部屋のドアを間違っただけで開けてしまったが、それらしい部屋を見つけた。名札がある部屋がいくつかあった。

ナミ、ロビン、そしてヴァイオレット。おそらく個人個人の部屋なのだろう。ヴァイオレットと書いてある名札の部屋のドアノブを握る。そして同時に悪い想像も膨らむ。

ヴァイオレットが2人から何も説明を受けてなかったら半殺しにされるんじゃないや…俺は恐る恐るドアを開けた。

「ん…？あ、貴方が2人が言ってた男ね？言わなくてもいいわ。全部わかるから。」

いた。ヴァイオレットだ。新聞で見たとおりの美人だ。しかも身体つきも申し分ない。エロい身体だ。

「ふふっ♡話には聞いてたけど、やっぱり頭の中はピンク一色ね♡いやらしい男♡」

俺は後ろに一步引いてしまった。そんなに鼻の下を伸ばしていただろうか。俺の心を読まれた？ヴァイオレットも何かの能力者なのか？

「あら？2人から説明を受けてなかった？私はギリギリの実際の眼力人間。簡単に言くと、人の心を読んだり、遠い場所を見たりできる能力者よ。」

納得した。俺がエロい身体だの新聞で見たままの美人だのといやらしい妄想をしていたのは全て彼女に筒抜けだったということだ。恥ずかしい。

「恥ずかしくなくていいの。そんな感情飽きるほど見てきたわ。それに…貴方はこれからそういうことをシに、私達の島に来るんでしょ？」

ヴァイオレットは口をんあ…と開けて舌を出し、れろれろつと動かしてエアーフェラをした。長い舌だ。ついさっきまでは普通の美人だったのに突然ドスケベな痴女のような表情に変貌した。エロい。

「さあ…私も溜まってるのよ♡相手して♡」

ヴァイオレットはゆっくり近づいてきて優しく俺を抱きしめた。いい匂いがする…

「ちゅ…♡れるっ♡ちゅう…♡」

いきなりディープキス。流石の痴女っぷりだ。俺もヴァイオレットの舌を舐めるように舌を動かす。

「んふ…♡ちゅっ♡ん♡」

ヴァイオレットは腕を回して俺を包み込むように抱きしめてくる。心地いい…それに雌の香りも漂っている。腋…か。

「ん…♡ぶあ…♡腋…舐めたいの…？♡変態ね…♡いいわよ♡ほら♡」

ヴァイオレットはまた俺の心を読んだようだ。腋を見せつけるように腕を上げた。むわあ…とエロい匂いが漂ってくる。俺はヴァイオレットの腋に舌を這わせ、ペロペロと舐め始めた。

「ん♡あ…♡くすぐりたい…♡」

時々漏れる可愛らしい喘ぎ声がかかります俺を興奮させる。俺は腋を犬のように舐めながら服の大きく開いた横の部分から手を入れ、ヴァイオレットの大きいおっぱいを驚掴む。押し返してくるような弾力はないものの、どこまでも指を飲み込んでいくような柔らかさが

ある。

「あつ♡腋とおっぱい同時…♡気持ちいい…♡」

俺はだんだん息が荒くなつていく。自分が腋の匂いでこんなに興奮するなんて考えてもなかった。腋を舐めて少し胸を揉んだだけでもうちんこはギンギンになっていた。

「あら…♡立派ね♡ふふふっ♡」

ヴァイオレットは優しく微笑みながら俺の股間の膨らみを優しく撫でる。じれったい…

「焦らないで♡ちゃんと気持ちよくしてあげるから♡」

ヴァイオレットはしゃがんで俺のズボンとパンツを脱がせる。自然とバキバキの俺のちんこがヴァイオレットの鼻先に当たる。

「すーっ…♡はああ…♡くっさあ…♡この匂い…たまらない…♡」

竿を優しく撫でながら匂いを嗅いでくる。昨日夜通しやってたから洗ってないのだが…その匂いが気に入ったらしい。ドスケベな女だ。

「どこで出したい？♡私の身体の好きなところに出して♡もちろん…おまんこでもいいのよ♡」

いきなりすごい誘惑だ。俺は中出ししたい気持ちを抑え、腋をもつと嗅ぎたいと言った。

「ふふっ♡そう言うと思ってたわ♡ほら♡私の腋をたっぷり味わいなさい♡」

ヴァイオレットは腕を上げ、腋を見せつけてくる。俺は当然躊躇なく腋の匂いを嗅ぎ始める。

「ん…♡鼻息がくすぐったい♡私の腋まんこはどうかしら？♡ふふっ♡」

気づけば俺は腋の匂いをオカズにオナニーしていた。目の前にこんな美女がいるのに、シゴいてもらうわけではなく自分でしていた。腋を顔に押し当てられてその匂いを必死になって嗅いでそれをオカズにしごく…悪い気はしない。

「うふふっ♡可愛いわね♡ほらほら♡」

ヴァイオレットは嬉しそうにぐりぐり腋を押し当ててくる。俺は

我慢するのをやめてしごくペースを上げる。すごく興奮する。もういきそうだ。ヴァイオレットにしゃがむように言って亀頭を腋に押し当てる。

「あんっ♡おちんぽ硬くて♡熱いっ♡私の腋まんこにっばい出してえっ♡」

さらにペースを上げる。ヴァイオレットの腋に…出すっ

ぶびゅっ♡♡びゅーっ♡びゅくっ♡

「んんんっ♡腋に♡熱いのっばいっ♡」《腋でおちんぽすっごい脈打ってる…♡これ…気持ちいいかも…♡》

ヴァイオレットの腋は俺の精液でどろどろだ。エロい。すぐにまたムラムラしてくる。

「ああ…♡イカくさい…♡」

ヴァイオレットは指で精液をすくい取ると指をしゃぶるようにして舐めとった。

「んふ…♡次はどうしたい？♡」

次は口だ。王族のフェラテクを堪能したい。

「ふふっ♡いいわよ♡あんまり上手くはないかもしれないけれど♡」

ヴァイオレットはそう言っとうっとりした目で俺のちんこを見つめてくる。ゆっくりと亀頭を舐めてから根元まで飲み込んでいく。

「ん…♡んぐ…♡ぐぽっ♡ぐぽっ♡」《ああ…♡喉まで届いてる…♡少し苦しいけど…♡イイかも…♡》

少し苦しそうな顔をしている。俺はつい興奮が抑えられなくなつてイラマチオに移行してしまう。ナミヤロビンとは違う割と分厚めな唇が気持ちいい。

「んんっ♡ふうっ♡んぶうっ♡」《やつ♡すごい♡喉奥ガンガン突かれてる♡うう♡苦しい♡》

気持ちいい…ヴァイオレットの口オナホが気持ちよすぎてつい好き勝手動いてしまう。もう出てしまいそうだ…ううっ

びゅるるるっ♡どくんっっ♡びゅくっ♡

「んぶっ♡んんんんっ♡くうう…♡」《あっ♡きたっ♡ザーメン♡喉に直接う…♡おいひら…♡》

すごい…口の気持ち良さで言えばナミヤロビンよりも上かもしれない。名残惜しいが、ゆっくり抜く。精液でいっぱい口のを見せてくる。エロい…

「んっ♡んくっ♡ぶあ…♡すごいよね…あなた♡軽くイっちゃったわ♡」

しつかり飲み干してからそう言う。もう我慢できない。犯したい。めちやくちやにしたい。

「あら♡今口まんこをめちやくちやにしたばかりじゃない♡欲張りね♡」

そういつつヴァイオレットはするする服を脱いでいく。綺麗な胸や長い脚が露わになる。

「さあ♡どうぞ♡好きなように犯して♡」

四つん這いになってお尻を突き出してくる。我慢できない。

俺はヴァイオレットのまんこに狙いをつけ、一気に挿入した。ロビンと似たような感覚。ヒダが一齐に絡みついてきて気持ちいい。

「あはあっ♡おつきい…♡ちよつと♡ゆっくり…♡ひあっつ♡♡」《うそ…♡入れただけで子宮突いてきて…♡気持ちいい…♡あっ♡》

ヴァイオレットの腰を掴んで思いつきり腰を打ち付けた。尻肉が波打っている。余計興奮する。

「んあ”っ♡ひっ♡イイツ♡気持ちいい♡やはあっ♡」

望み通りペースを上げる。俺は長く持たないから速くするのは苦手なんだが、望まれては仕方ない。

「あんっ♡すごいっ♡はあんっ♡ちんぽっ♡おちんぽイイのおっ♡」  
王家の美女が俺のちんこでよがり狂っている。征服感と快楽で二重で気持ちいい。もういきそうだが更にペースを上げて突きまくる。

「あはっ♡はっ♡あんっ♡ひあんっ♡きてっ♡熱いのきてえっ♡」

ペースを上げたせいでもういきそうなのも読まれている…くう…  
いっ…くっ

どくんっ♡びゅーっ♡どくどくっっ♡

「あはあああん♡イックウウツ♡」《あああっ♡イクイクイクウウツ♡  
すごいっ♡熱いのがきてるうっ♡》

早めに引き抜いて身体にもかける。ヴァイオレットは中も外も俺の精液でどろどろだ。

「んあ…♡あつ♡すごい…♡久々にこんなに激しくイっちゃった…♡」

ヴァイオレット…王族のくせにすごい淫乱だ。まだ物欲しそうな目でこつちを見ている。ナミもロビンもいるし、島に着くまで休憩時間はないさそうだ。俺は早速ヴァイオレットと二回戦を始めた。



## ゴーストプリンセス編

ナミ、ロビン、ヴァイオレットと共に美女しかいないと聞かされている島に向かう。途中目立ったトラブルもなく、美女3人とやり取り、遂にたどり着いた。

ナミ「んゝ着いたゝ！結構風も安定してたし早く着けてよかった。」  
ロビン「それに男にも困らなかつたしね♡よく頑張ってくれたわ♡」

ヴァイオレット「これからはもっと頑張らなきゃいけないけどね♡」

これからもっと…散々やったばかりだがもうムラムラしてきた。

ナミ「じゃあ解散？あんたも好きな子見つけたらガンガンアタックしちやいなさい♡」

ロビン「そうね。またやりたくなったら声かけるわね♡色男さん♡ふふっ」

ヴァイオレット「私もそうするわ♡じゃあ楽しんでね♡」

3人はそう言って行ってしまった。さて…本当に誰でもやっていいのだろうか。確かめたくなくなった。本当に大丈夫ならこの島の美女達全員に中出ししてやりたい。

お：あの子は見覚えがある。確か七武海の部下の…ペローナ。すぐく丈が短いスカートに長い靴下。お腹は露出しているもの他はあまり出していない、ナミはあまり着なそうな服装だ。

3人の言葉を信じ、早速声をかけてみることにした。

「ん？なんだ？私に何か用か？」

ピンク色の髪をなびかせながら振り返る。可愛い。少し子供に近いような可愛さだ。

「ちよつとまで…もしかしてお前…男…？」

ペローナは男に声をかけられていることに驚いているらしい。少なくともこの島に男がいないのは本当のようだ。俺は首を縦に降る。

「おおーホントかー！じゃあ、ちよつとこつちこい！話はその後でいいだろ☒」

ペローナは俺の手をぐいぐい引っ張って家へ連れ込む。たまたま家を出た直後だったようだ。

家の中はぬいぐるみと可愛らしい服でいっぱい。いかにも女の子らしい家だ。花のような香りもする。

「お前、男なら…その…私とSEXしてくれ！ムラムラしてるんだよっ！」

きた。誰とでもやれるのも本当だった。こんなに可愛い子が俺にSEXしてくれと頼んできている。もちろん断る理由はない。YESだ。

「ホントか！やったっ！じゃあ…その…優しく頼むぞ…？」

ペローナは上目遣いで胸を寄せながらじっと見つめてくる。冷静でなんていられない。俺はペローナをガバツと抱きしめた。無意識に硬くなったモノが当たってしまっつう。

「ひゃんっ♡この…スケベ♡」

ちろつと舌を出してからかってくる。可愛すぎる…俺はたまらずペローナにちんこをしゃぶるように頼んだ。

「え…？♡しゃぶってくれて…♡し、しょうがねえな…♡特別だからな♡」

ペローナは姿勢を低くし、俺の服を脱がせる。パンツを脱がされた途端俺のちんこがピンツと跳ねる。

「うう…♡くさあ…♡お前…ちゃんと洗えよな…♡ん♡」《ああ…♡ちんぽの匂い♡くさいけど…好きい…♡》

ペローナは俺のちんこを丁寧に舐めてカスを舐め取ってくれている。

「ん…♡ちゆう…♡ぴちや…♡」

亀頭を舐め回しながら吸い付いてくる。ペローナの頭を撫でてみる。

「あむ…♡ん♡ぐぶっ♡じゅるっ♡」

竿まで啜え込んでしゃぶりついてきた。気持ちいい。もうちんこがビクビクし始めた。

「んっ♡んむっ♡んんっ♡」

より一層激しくしゃぶりついてくる。我慢できない…ペローナの頭をぐいっと引き寄せて奥まで入れる。

どくんっつ♡♡♡びゅるるるっ♡♡どぶっ♡

「んふううっ♡んぶっ♡じゅるるるっ♡」《あぁっ♡こんなっ♡おおすぎっ♡んくううっ♡》

ペローナが口を離して口を開ける。こんな可愛い子の口の中が俺の精液でいっぱいだ。興奮する。

「けほっ♡んっ♡んくっ♡ぶぁ…♡出し過ぎだ…♡それにすっごく濃いし…♡」《喉に引つかかる…♡まだちよつと苦しい…♡》

ペローナは少し怒ったような顔でそう言う。ますます興奮してしまった。

「次はどうしてほしいんだ？♡特別だ♡少しくらいなら聞いてやるぞ♡」

俺の言う通りにしてくれるらしい。俺は迷わずおっぱいで挟んでほしいと頼んだ。

「え…おっぱいで…か…♡それくらいなら…いいぞ…♡」

顔を真っ赤にしながら承諾してくれた。俺は仰向けに寝転がるようにいって、その上にまたがった。

「優しくな…♡♡あんまり激しくするなよ…♡」《やっぱりこいつのデカイ…♡もうちよつとでこんなのが私の中に…♡早くSEXしたい♡》

ペローナは服をたくし上げ、胸を出してそう言った。俺は谷間にちんこを挟んで、両側から胸を押して圧をかけてみた。

柔らかくてあったかくて気持ちいい。ナミよりも少し張りがある気がする。俺はゆっくりと腰を振り始めた。

「ん…♡おっぱい擦れて…♡あつい…♡びちや…♡れる♡」

亀頭をいやらしい音を立てながら舐めてくる。エロすぎてもう優しくなんてしてられない。おっぱいをむぎゅううつと鷲掴みにしながら本当のSEXのように腰をふる。気持ちいい。

「んっ♡あんっ♡ちよっ♡優しくしろっつ♡♡やんっ♡」

俺が腰を振るたび、挿れられているかのように喘ぐ。余計興奮して

し

まっでもう我慢できない。

びゅるるるっ♡どぶっ♡びゅーっ♡

「やああっ♡あついっ♡ああんっ♡」《ああっ♡くっさいザーメン顔に  
いっばいい♡》

ペローナの可愛い顔に思いつきりぶっかけ。最高だ。

「うう…髪にまで飛ばしやがって…♡変態やろーが♡」

ティツシユで俺の精液を拭き取りながらそう言う。可愛い。俺は  
休む間も無くペローナに挿れさせてくれと頼んだ。

「も、もうか?まあ…いいぞ…♡何回も言うけど特別だからな!／／

／

やっぱり恥ずかしいのか顔を真っ赤にしながら答えた。俺はもう  
一度仰向けに寝ころがるように言って、太ももをむにむにしながらち  
んこをまんこに擦り付けた。

「んんっ♡もお♡太ももばかり触るなっ♡擦り付けるなあっ♡早く  
挿れてくれよおっ♡」《ああ♡おつきい♡これが今から私の中に…♡》  
俺はペローナを抱きしめてぐっとな腰を突き出す。肉壁を掻き分け  
てゆっくり入っていく。

「んあ…♡はあ♡きたあ…♡ゆ、ゆっくり頼むぞ…?♡」

可愛すぎてつい我を忘れそうになるが、理性で抑え込みゆっくり腰  
を振る。ゆっくりしてるせいで余計気持ちよくてつい強く抱きしめ  
てしまう。

「あっ♡んん…♡いいぞ…♡意外と上手いじゃねえか…♡」《ああ…♡  
久々のちんぽ…♡気持ちいい…♡

ペローナは満足そうな顔をしながら俺の頭を撫でてくる。理性が  
弾けた。無理だ。可愛すぎる。俺は一気にペースを上げて乱暴に犯  
す。

「んあっ♡ちよっ♡はげしっ♡あんっ♡」《やあっ♡急に激しくっ♡  
んああっ♡》

ペローナも無意識かもしれないが俺のことを抱きしめてくる。余  
計興奮してしまつて更に激しく腰を振る。

「あはっ♡んんっ♡まってっ♡すげーいっ♡」《こいつっ♡子宮まで容赦なく突いてくるっ♡あんっ♡気持ちいいっ♡》

可愛い喘ぎ声とたぶたぶ揺れるおっぱいにゾクゾクして、思いつきり腰を振ってしまう。

「ひああっ♡いいっ♡お願いっ♡そのまま中に出してえっ♡イクツ♡んはああっ♡」

許可も得たので遠慮なく生中出し。子宮に直接流し込む

びゅくんっっ♡びゅるるっ♡どぶどぶうっ♡

「ああっ♡ひいっ♡おあああっ♡しきゅーあつひいっ♡」《あああっ♡きたきたっ♡ザーメンきたっ♡渴いた子宮にのーこーザーメンツツ♡》

たっぷり中に出して大満足だ。ゆっくり引き抜いてペローナの顔に精液まみれのちんこをずいっと突き出す。

「はあ…♡はあ…♡お掃除しろってことか…♡？♡全く…私を好き勝手使いやがって…♡んふう…♡じゅる…♡」《うう…♡ザーメンの匂い…♡悔しいけど…我慢できない…♡》

ペローナは少し悔しそうな表情でちんこをしゃぶる。たまらない。ペローナの頭を撫でてやりながら綺麗になったであろうタイミングで抜く。

「んぷあ…♡ん…もういいのか…♡？♡」

物足りなそうな表情でこちらを見つめてくる。だが、この島には数々の美女がいる。全員犯して中出ししてやりたいのでここでペローナ相手に枯らされる訳にはいかないのだ。

もう満足だ、と言いペローナに抱きつく。ペローナも悪い気はしていないようだ。

「ん…♡そうか…♡けどまだおつきいってことは…別のやつとしたいんだろ？」

バレた。怒られるかもしれない…俺は少しびくびくしながら首を縦に降る。

「ちえっ、私だっただだしたいのに…まあ…しょうがない…♡またしたくなったら遠慮なく来いよな♡また相手してやるぞ♡」

またしたくなったら…今すぐにも両者壊れるまでSEXしたいが、ぐつとこらえてありがとうと伝えて服を着る。

「街でまた会ったら…またしてくれよな♡またな♡」

頬を赤らめながらそう言ってくる。こんな可愛い子に誘われてそれを断って別の美女とSEXしに行くなんて考えてもなかった。

俺はペローナとまた会ったらしようと約束してペローナの家を出る。次は誰にしようか…そう考えながら周りを見渡していると網々イツで身体を覆っているメガネをかけた美女が俺の目にとまった。

## カリファ編

ペローナの家から出てすぐに、全身網タイツの美女を見かけた。この島の住民なのだろうか。

なら話は早い。名前はわからないが、早速後ろから声をかけてみる。

「ん？私に何か用かしら？」

髪をなびかせて振り返る。やはり美人だ。眼鏡もかけていて大人な感じだ。思い切つてナンパしてみる。

「私と食事…？実は別に目的があるんじゃないやなくて？ふふっ」

見透かされている。俺は正直に話してから名前を聞いた。

「ふうん…私といやらしいことがしたいのね…♡いいわよ♡ついてきて♡私はカリファ♡よろしくね♡」

髪を耳にかけながらそう言った。俺は後ろについていきながらすでにゾクゾクしていた。すごくいい匂いがする。

「さあ、入って。」

中はすごく綺麗に片付けられていて、まさに大人の女性の家という感じだ。

「で…どんなことがしたいのかしら？♡私はソーププレイとか得意よ♡」

カリファのおすすめ通りソーププレイをしてみようことにした。ソーププレイが得意…この島にくる前はそういう仕事でもしていたのだろうか。

カリファは脱衣所へ俺を案内してからなんの恥じらいもなく脱ぎ始めた。エロい身体だ。

「ふふっ♡そんなに見られると恥ずかしいわね♡あら♡すごく元気ね♡」

俺は無意識のうちにカリファの身体を見つめながら勃たせてしまっていたようだ。カリファは俺のちんこを指でつつきながらくすくす笑う。

「さあ♡ここに横になって♡面白いことしてあげるわよ♡」

風呂場の床にマットを敷いてそうだった。俺は言われたように寝転がる。

「じゃあ…失礼♡ん♡」

カリファは俺の上に乗って身体を擦り付けるように動いた。するとなぜか泡が立ち始めた。石鹸はつけていなかったはずだ。

「ふふっ♡私にはアワアワの実際の石鹸人間♡戦闘にも使うけれど、こういうプレイにも使えるのよ♡」

俺に胸を擦り付けながらそう言った。少し驚いたが、ロビンにハナハナの能力で搾られたおかげか、あまり衝撃的な感じではなかった。それに、大きいおっぱいが泡でつるつる滑って気持ちいい。

「こっちもガチガチね♡ん…♡れえ…♡」《おつきくて硬い…♡立派なちんぽ…♡》

つつーと滑って俺のちんこを舐め始めた。いやらしい舌使いだ。思わず腰が動いてしまう。

「んふ…♡かぶっ♡じゆるるっ♡」(ううっ♡根元まで啜えると喉まできちやう…♡くるひい…♡)

一気に根元まで啜え込んだきた。あつたかくて気持ちいい。

「んっ♡ふっ♡ちゆく…♡」

すごいフェラテクだ。それにエロい顔でこっちを見つめてくる。すぐにでもいってしまいそうだ。

「んっ♡んむっ♡ぐぼっ♡ぐぼっ♡じゅぼっ♡」

いきそうなのを察したのか口をすぼめてひよつとこフェラ。もう我慢できない

びゅくっつ♡どぶどぶっ♡どくんっ♡

「んふううっ♡んぐっ♡んくっ♡じゆるるるるっ♡」《ああっ♡すっごいたくさん♡喉の奥まできてるう…♡》

出し終わった後もバキュームして尿道に残った精液もしつかり吸い上げてくる。流石だ。

「んっ♡んん…♡はああ…♡すごく濃厚…♡それにまだまだ大きい…♡」《喉に絡みつくこの感じ…♡久しぶり…♡くせになる…♡》

カリファは俺の精液を飲み干してからうつつりした表情で見つめ



てきた。すごい色気だ。もう我慢できない。俺はカリファに挿れさせてくれと頼んだ。

「だめよ…♡ものには順序があるの…♡はむ…♡ちゅう…♡」

カリファは立ち上がるなり俺を立たせて強引にキスしてきた。長い舌で俺の口の中を舐め回してくる。ゾクゾクする。

「はふ…♡くちゅ…♡れる…♡」

やばい。膝がガクガクしてきた。なんて上手いキスだ。

「んふ…♡ちゅっ♡ぷあ…♡ふふっ♡可愛いわね♡」

口を離してからかうような目で見てくる。俺は我慢できなくなつてカリファをマットの上に押し倒した。

「やんっ♡積極的ね…♡いいわよ♡きて♡」

カリファは恥ずかしげもなく脚を広げた。まんこが愛液でぐしよぐしよだ。俺はカリファに覆い被さつてまんこにちんこを擦り付けた。

「あっ♡んん…♡焦らさないで…♡んあ…♡」《熱くて硬い…♡これが今から私の中に…♡》

俺はぐつと腰を突き出して挿入した。中も愛液でぬるぬるで、肌がすべすべで気持ちいい。俺はカリファを強く抱きしめて必死に腰を振る。

「あああっ♡きたっ♡太いつ♡あんっ♡あはあっ♡」《きたきたあっ♡久しぶりのおちんぽ♡子宮まできてるうっ♡》

カリファの胸を鷲掴みにして揉みしだきながらガンガン腰を振る。カリファのいやらしい声が浴室に響く。

「あんっ♡すごっ♡はっ♡はああっ♡」

カリファは一突き毎に腰をびくんつと跳ねさせる。あんなにクールそうだった女が俺の目の前で喘いでいる。ゾクゾクして腰が止まらない。カリファは無意識なのか脚を俺の腰に巻きつけて引き寄せてくる。

「ああんっ♡イイツ♡もっ♡もっときてえっ♡う”んんっ♡」

身体を反らせて喘いでいる。エロすぎる。もう出そうだ。ぱんっぱんっ♡音を立てて腰を打ち付ける。

「はあんっ♡ああっ♡強すぎっ♡イギツ♡ひっ♡ぐううっ♡」《ああっ♡そんなに強く突いちやだめえっ♡やだっ♡イカされちやうっ♡あはあっ♡イクツ♡イクイクウウウツ♡》

俺ももう限界だ。カリファの両手首を掴んで引っ張って子宮に押し当てながら思いつきり中出し

びゆくんっ♡びゆるるるるっ♡びゆぐーっ♡

「あ”っっ♡ひぎああっ♡あ”あ”あ”あ”あ”っ♡」《あああっ♡中に思いつきり出されてるううっ♡》

気持ちいい…今までやった中で一番の名器かもしれない。俺はたんとたんっと腰を振って搾り出してからちんこをゆっくり引き抜く。カリファは抜いた後も軽く痙攣している。

「はああ…♡あなたすごいわね…♡すごく気持ちよかった…♡」《お腹あつい…♡まだ腰が震えちやう…♡》

俺は軽く泡を流してから身体を拭いた。

「あら…もういいの…?」

カリファは物足りなそうな顔でこつちを見る。今すぐにでも犯してやりたいが、俺はこの島の美女全員に中出しする目標を持ってこの島に来た。このままカリファとやっているとあっという間に搾りつくされそうだ。

俺は首を縦に振ってまたいつかしたいと言った。

「ふふっ♡またいつでも誘って…♡待ってるわ♡」

カリファも歓迎してくれるようだ。ありがたい。

俺は手早く服を着た。

「じゃあまた今度♡たくさん溜めてきてちようだいね♡」

すごい女だ。さっきまで痙攣していたのにもう回復しているようだ。次来的时候は言われたとおりたっぷり溜めてこなくては。

俺は少し危ないプレイもしてみたくなり、裏道を歩くことにした。こんな年中発情期の女達のいる島だ。裏道で1人でシてる人もいるだろう。

すぐに見つかった。ちようどカリファの家の裏辺り、人気のない道で刀の鞘を擦り付けてオナニーをしている可愛い女が。

## 海軍剣士編

カリファの家のちようど真裏辺り、眼鏡をかけた可愛い女がいた。しかもまんこを刀の鞘に擦り付けている。特殊な性癖でもあるのだろうか…そう思いつつとりあえず声をかけようとした。

しかし話しかける前に俺は普通に話しかけたんじゃ面白くない、と思っただ。

そこで、わざと大きな足音を立てて近づく。刀がガチャガチャいつているのが聞こえる。慌てて服を着ているのだろう。

俺は誰かいるのかと気づいていない風を装い、覗き込んだ。

「あ、す、すみません！うるさかったでしょうか…？」

顔を真っ赤にしながら謝ってきた。可愛い。俺はすぐにでもやりたくなってしまい、すぐ声をかけようとした。

「ち、ちよつと待ってください…貴方もしかして…男…？」

前までならここで切られたりしないかと怖気付いていたがもうその必要はない。俺は縦に首を振る。

「じゃあちよつと付き合ってもらっていいですか☒その…この家から喘ぎ声が聞こえてムラムラしてしまって…」

少しうつむきながら頼んできた。おそらく聞こえてきたという声はカリファだろう。俺は承諾し、手を握って歩き出した。全くの計算通り。上手くいった。

「そ、その…ここでじゃダメですか…？私…もう我慢できないです…♡」

目をハートにしながら股を抑えながらもじもじしている。可愛い。

よく考えれば野外はナミとロビンとしかしていなかった。久々に外でするのもいい。俺はokした。その途端女は唇を重ねてきた。

「んっ♡ちゅうっ♡はぶ…♡」《男の人っ♡久々の男の人っ♡》

大人しそうな外見とは裏腹に情熱的なキスだ。

「ん…♡ぶあ…♡あ…すみません、名乗りもしないでキスしちゃって…私、たしぎと言います♡よろしくお願いしますね♡」

彼女は口を離してたしぎと名乗った。カリファやロビンとは違う、

大人っぽくはない、可愛い子だ。

「ああ…♡もうこんな大きく…♡失礼します♡」

俺のちんこがズボンの中でパンパンに膨れ上がっているのを見らや否やすぐにしゃがんで俺のズボンとパンツを下ろした。溜まっていたのだろう。

脱がされると俺のちんこはぶるんつと跳ねてたしぎの鼻先に当たった。根元を握って匂いを嗅いでくる。

「すんすん…♡すーっ♡はーっ♡ふうっ♡ふうっ♡」「ちんぽっ♡ああっ♡エツチな匂い♡すきい♡」

今までで一番匂いを嗅いでくる。ますます興奮してきた。

「あああ…♡ん…♡はぶう…♡」

何も言わずにしゃぶりついてきた。やばい。口の中が狭くて気持ちいい。

「じゅるるっ♡ぐぶっ♡じゅぶっ♡」《んう…♡おっきい…♡顎が外れちやいそう…♡》

激しくしゃぶりつきながら時々甘噛みしてくる。もしかしてたしぎは清楚に見えてド淫乱なのか…？そんなことを考えてしまうほど上手い。

「はぶっ♡ちゅうっ♡じゅるるるっ♡」《はむ♡はむ♡ちんぽ♡ちんぽすき♡美味しい♡》

亀頭に軽く噛み付いて吸い付いてくる。後ろの壁にもたれかかり、歯を食いしばって耐える。

「ずろろっ♡じゅぶっ♡ぐぽっ♡ぐぽっ♡」《あ♡またおっきくなった♡いきそうなのかなっ♡だしてっ♡だしてっ♡》

また激しくしゃぶり始めた。もう我慢できない…ッ  
どくんっ♡びゅくっ♡びゅーっ♡

「んんんっ♡んぶっ♡じゅるるっ♡」(久々のザーメンッ♡どろどろでおいしい…♡)

たしぎは俺の精液をおいしそうに喉を鳴らして飲んでいく。勃起が全く収まらない。

「んふふ…♡まだまだ元気ですね…♡男の人はこれが好きって聞きま

したっ♡えいつ♡」

たしぎは俺を押し倒して服を脱ぎ捨てておっぱいで俺のちんこを挟み込んだ。

「えへ…♡おっぱいからおちんぼの熱が伝わってきます…♡きもちい  
ですか…?♡」

たまらない乳圧だ。柔らかくてあつたかくてハリがある。母乳がパンパンに詰まっついていそうだ。

「んっ♡はっ♡はっ♡」《ちんぽ擦れて熱い…♡あ♡先っぽから出てきてる♡ちゅっ♡》

亀頭をちろちろ舐め始めた。男のいない島の住人とは思えないテ  
クダ。気持ちいい。

「れえ…♡ちゅっ♡んっ♡んっ♡」

たぱったぱつと音を立てながら竿をしごき、舌先で亀頭を舐め回し  
てくる。やばい、一気に精液が上がってくる…ッ

「はふっ♡おちんぽビクビクしてる♡だしてっ♡私のおっぱい妊娠さ  
せちゃってくださいっ♡」

両側から押さえて圧を強めてくる。もう無理だ、出るッ

びゅくびゅくっっ♡どくんっ♡どぶっ♡

「ひゃあんっ♡ああ♡顔まで飛んできちゃいました…♡すっごくどろ  
どろ…♡」《んん…♡ザーメンくっさあ…♡クセになる…♡ザーメン  
もっどほしい…♡》

口元の精液をぺろっつと舐めとりながら言う。エロすぎ2発出した  
のにガチガチだ。

「はあん…♡たまらないです…♡我慢できませんっ♡下のお口にもっ  
♡はやくおちんぽくださいっ♡」

ズボンとパンツを脱いでお尻をこっちに突き出してくる。俺は迷  
わずお尻を鷲掴みにして揉む。

「んんっ♡興奮しちゃいました…?♡あんっ♡」

可愛い顔して結構ムチムチだ。鍛えているからだろうか…ちんこ  
を擦り付けてみると向こうから腰を動かしてきた。

「やんっ♡焦らさないでくださいっ♡早く、おまんこにくださいっ♡

はっ♡はっ♡「《あぁっ♡こんなおっきいのが今から私の中に…はやくっ♡はやくちんぽっ♡ちんぽおっ♡》

犬のように息を荒げてねだってくる。俺だって我慢できない。望み通り一気に奥まで挿れる。

「んんっ♡はぁあぁっ♡あんっ♡おっきい…♡」《しゅごお…♡挿れただけで奥まで届いてる…♡気持ちいい…♡》

すぐくキツイ。ギチギチ締め付けてきて気持ちいい。

「あんっ♡はんっ♡きもちっ♡んっ♡」

俺はいやらしい尻肉を掴みながら必死に腰を振る。あまりの快楽に強く掴むときゅんっとして強く締まる。

「あっ♡おしり♡ぎゅっしてしちやダメですうっ♡あんっ♡」《お尻ギユってされるの好きっ♡あぁっ♡気持ちいいのおっ♡》

確信した。たしぎはこんなに可愛い見た目のくせしてマゾだ。俺は強めにお尻を叩く。

「ひぁっ♡やんっ♡おしりっ♡ひううっ♡」《バレちゃったあ…♡私がMなのバレちゃった…♡あぁ♡お尻叩かれながら奥突かれるの気持ちいい…♡》

お尻を叩く度キュンキュン締め付けてくる。もうイってしまいうだ。

「あぁんっ♡おちんぽビクビクツッしてるっ♡いいですっ♡そのまま突いてっ♡中にだしてえっ♡」《気持ちいい♡気持ちいい♡そのままザーメン中に♡いっぱいだしてえっ♡》

望み通り遠慮なく中にたっぷり注ぎ込む

びゅるるるるっ♡どぶっ♡びゅーっ♡

「んはぁあぁあぁっ♡うあっ♡ひ、ぎゅうう…ツ♡」《あはぁっ♡子宮にどろどろで熱いのがいっぱいキてる…♡あつたか…♡きもちいい…♡》

俺は勢いよく引き抜いてお尻にもぶっかけてやった。

「あふぁあっ♡んお…♡はーっ♡はーっ♡」(ひぎっ♡急に引き抜いちやあぁっ♡あぁ…♡ザーメン溢れちゃう…♡あっ♡お尻にもお…♡)

たしぎは満足そうな蕩けた顔で振り向いた。可愛い。

「あはあ…♡すごい…♡お腹たぷたぷです…♡もう一回は…ダメですか…♡」

俺はたしぎの誘いに思わず乗りそうになった。可愛すぎる。だが、この島の女全員とやりたいのだ。たしぎとやったら絶対全て搾られる。

俺はたしぎの誘いを断った。たしぎは寂しそうに俯いてしまった。

俺はまたいつかしようと言った。機嫌取りではなく本気で。たしぎは嬉しそうに笑ってくれた。

「またしてくれるんです…♡」

俺は当然首を縦に振った。

「んふ…♡嬉しいです…♡えへへ…♡あ、ん…♡」《ああ…♡おまんこまだウズウズするっ♡我慢できないっ♡》

たしぎは蕩けた表情でぐちゅぐちゅと音を立てながらまたまんこをいじり始めた。今すぐ犯してやりたいが我慢だ。島の女全員とやったあとまた声をかけよう。

「じゃあ…また今度…♡んんっ♡あっ♡」

俺は服を着て歩き出した。いくら人通りが少ないとはいえ路地裏であんな音立てながらオナニーはまずいんじゃ…？と思ったが女しかないのでレイプの心配はなさそうだ。

俺は路地地に出て周りを見渡した。するとまたすぐに見つかった。というか目があった。相手は目は隠れているが、恐らく。

目があった相手は新聞でも見たことがない。前が大きく開いたピンク色の服を纏った綺麗な女性だった。

## 獄卒長編

たしぎとヤって路地に出てすぐ、美女と目があつた。美女はこちらへ近づいてきた。

前が大きく開いたピンク色の服、それにあれば…頭からツノが生えている…。唇がとてもセクシーだ。

「ねえあなた…たしぎちゃんとシたでしょ？♡」

名前もわからない女にたしぎとヤつたのがバレている。俺はかなり焦っていた。怒られるかもしれない。

「たしぎちゃんはね…私のペットだったのよ…♡それをあんなにトロトロにしてくれちゃって…♡」

俺のちんこを指でなぞりながらそう言う。ペット…SMでもしていたのだろうか。とりあえず謝らなくては。

「あら…別に謝らなくていいわ♡その代わり…責任とりなさい…？♡」

責任…俺にペットになれと言うのだろうか。正直こんな美女なら、とを考えてしまったが、なにをされるかわからない。俺はどう責任を取ればいいのか尋ねた。

「ん〜♡簡単よ♡私を満足させなさい♡たしぎちゃんて遊ぶつもりだったのに遊べなかったから…ムラムラしてるのよ♡」

俺の顎をくいとしながら言った。そんな服装で身体を見せつけられているのだ。むしろお願いしたいぐらいだった。当然承諾した。

「ふふっ♡じゃあついていらっしやい♡私はサディちゃん♡サディちゃんとお呼び♡」

自分にちゃん付け…少し違和感はあるが気にしないでおこう。

サディちゃんは少し歩いて自分の家に俺を招き入れた。

「さあ上がって♡んふふっ♡」

ペろっ舌舐めずりしながら入るように言った。かなり長い舌だ。エロい。

ちらつと見えた部屋の中に鞭やら手錠やらが転がっている。「ペット」とはやっぱりそういう意味だったか。



「あら♡貴方も調教が好みかしら?♡」

俺は首を横に振った。正直ペットになるくらいならいいが、痛いプレイは御免である。

「そうなの…まあいいわ♡」

そんな話をしているうちにベッドルームに着いた。

「さあ…♡はじめましょうか♡」

サディちゃんはペろつと舌舐めずりしながら胸の部分をたくし上げ、ズボンに指をかけながら言う。こつちだつてその服装でその身体を見せつけられているのだ。我慢できない。

「はあ…♡んちゅっ♡ちゅう…♡」

俺をベッドに押し倒していきなり濃厚なキス。長い舌が俺の口内を舐め回してくる。ゾクゾクする。

「れる…♡ちゅっ♡はぷ…♡」  
腰をくねらせながら首に腕を回して胸を押し当ててくる。柔らかい…

「んぷあ…♡こつちの方も…元気になったわね♡」

キスと胸の感触だけでガチガチになってしまった。サディちゃんはさつとしゃがんで腹を脱がせてくる。

「んふうん…♡この匂い…♡んゝっ♡たまんなあい♡」《何日も洗っていないのかしら…♡くさくてクセになる…♡》

この島の女はみんなエロい顔で匂いを嗅いでくる。興奮してしまう。

「ぴちや…♡れる…♡ちゅっ♡づるるるるっ♡」

長い舌で舐め回してから一気に啜え込んでくる。

「ぐぼっ♡ぐぼっ♡じゅるるっ♡」

いやらしい音を立てて激しく吸い付いてくる。舌が別の生き物のように絡みついてくる。気持ちいい。

「ずじゅるるるるっ♡ぢゅぼっ♡ぢゅぼっ♡」

口をすぼめて吸い付いてくる。すごいバキューム。もう限界だ。

びゅるるっ♡びゅくっ♡どぶんっ♡

「んふうんっ♡んんっ♡んくっ♡んくっ♡」《ああっ♡すっ♡い量♡

いいわあ…♡》

喉を鳴らして飲み干していく。エロい。

「うふ…♡すごいわね…♡次はおっぱいね♡」

胸をじつと見ていたのがバレたのか、おっぱいで俺のちんこを挟み込む。柔らかくて気持ちいい。

「んくっ♡熱いわあ♡先っぽが出てきてる♡ちゅっ♡」

サディちゃんは自分の巨乳からはみ出した亀頭をぺろっつと舐める。思わず腰が浮いてしまう。

「んふう♡ほらっ♡私のおっぱいはどう？♡気持ちいいでしょう♡ちゅるっ♡ぴちゃ♡」

エロい音を立てながら舌を器用に動かして舐め回してくる。気持ちいい。

「ん♡また一段と熱くなったわあ♡いきそうなのかしら？♡」

目元は見えないが、にやにやしながら胸を上下に動かしてすごいくる。もう限界だ。

びゅびゅっ♡びゅるるるっ♡

「あはあっ♡んくっ♡たまんなあ♡」

ぐぐっつと圧をかけて搾り出しながら顔に飛んだ精液を舐めとっている。全く興奮が収まらない。

「んふ…♡あなた気に入ったわ♡特別に好きにしていいわよ♡」

サディちゃんはズボンをまんこがみえる辺りまで下ろしてベットに横たわる。こっちだって我慢できない。

好きにしていると言われたのだ。なにも物怖じすることはない。

腰を挿んでずんつと一気に挿入。

「はあんっ♡ん♡おつきいわあ…♡ほら…♡好きに動いて♡」《挿れただけで奥に届いてる…♡すごい♡》

DSの美女が俺のちんこで感じている。最高だ。

「んっ♡ああんっ♡イイっ♡もつと激しくっ♡」《突く度に子宮に当たってるっ♡気持ちいい♡》

望み通り腰を強く挿んで思いつきり腰を振る。ずちゅっ♡ぐちゅっ♡といやらしい音が響く。

「んふうんっ♡んんっ♡ああっ♡ひあんっ♡」

サデイちゃんのまんこを遠慮なく突き立て、好き勝手犯していると早くも限界が近い。

「ん、あんっ♡出そうなのかしら？♡いいわよっ♡遠慮はいらないわ♡そのまま中に出してえっ♡」《おちんぽまたおつきくなっただっ♡もうすぐくるっ♡子宮にザーメン♡ああっ♡》

言われたようになんの遠慮もなく思いつきり突いて中出し。

ぶびゅるるっ♡どぶっ♡びゅーっ♡

「あっ♡はああんっ♡んああっ♡」《きたあっ♡あっつい生ザーメン♡ああんっ♡イイツ♡》

俺はペローナの時と同じように射精し終わってからサデイちゃんの口元にちんこを突き出す。

「んふうん…♡私を玩具みたいに…♡んじゅるるっ♡」《ザーメンまみれのちんぽくさあ…♡私が責めるはずだったのに…♡》

射精したばかりのちんこを中出ししたばかりの美女にしゃぶってもらおう。気持ちいい

またガチガチになっただくらいでゆっくり引き抜く。

「あら…♡もういいの…？♡」

少し物足りなそうに言う。この島の女性の性欲は本当にすごい。俺は島全員の子たちとシたいのだ、いうことを伝えた。

「ん…：そうなの…：まあいいわ♡次来た時はちゃんと満足させなさい♡」

サデイちゃんは納得してくれた。ありがたい。俺はさつと服を着てサデイちゃんの家を出る。

パツと見回したが好みの女性は見つからなかったので少し離れたところまで歩いた。

豪華な商店街のような場所に着いた。するとすぐに見つかった。どこだかの国の王家の青髪的美女が。

## 砂漠の王女編

豪華な街並みに似合う派手ではないが綺麗な服、青髪、エロい身体。好みだった。

この島の女達は誘えばついてきてくれる。迷わず声をかけた。

「はい…？私とH…？どなたですかいきなり…」

相手は振り返って頬を膨らませてきた。怒っているのだろうか。前までならここでビビり倒していたが、今では可愛いという気持ちが勝つ。

「ん…まあ、私もちよつと溜まってるので…相手してあげます…♡」

よし。こんな美女とも簡単にやれてしまう。天国のような島だ。

「私はビビです♡さあ、付いてきてください♡」

相手はビビと名乗り手を引いてきた。可愛い。しかしデカイ宮殿に真っ先に向かっていくのはなぜなのだ…？

「ん？ホテル…？いえいえ、ここが私の家です♡」

階段を上がりながここが家だと言う。冗談だろうか？そういえばビビも新聞のレヴェリーの記事で見た気がする。どこかの王女か。

長い廊下を進み、それっぽい部屋にたどり着いた。

「さあつきましたっ♡んふふ…♡」

部屋に入って数歩進んでスケベな顔で振り返った。思わずドキツとして、興奮してしまふ。

「ほらほら…誰も見てないですから脱いでください…♡」

俺は言われた通り服を脱ぐ。

「ああ…♡すつこく立派…♡んちゅ…♡」

ちんこをじつと見つめるや否やしゃがみこんで亀頭にキスして唇で亀頭を包み込んだ。

唾液がにゆるにゆるしていて気持ちいい。

「ん…♡ちゅっ♡じゅるるっ♡」《ああ…♡久しぶりのちんぽ…♡美味しい…♡》

上手い。唾液をローションがようにぬるぬるで、それを使って舌を滑らせてくる。一国の王女のフェラ…そう考えると余計興奮する。

「んうっ♡んっ♡ふっ♡」《んんっ♡またおつきくなっ♡いきそうなのかしら…♡》

ビクツと震えたのを感じ取ったのか頭を前後に動かして思いつきりしやぶりついてくる。やばい。もういきそうだ。

「ぐぶっ♡じゅぶっ♡ちゅううっ♡」《あっ♡先っぽ膨らんできた♡出して♡お口に♡ザーメンっ♡》

我慢出来ない。王女の口に思いつきり出すっ

どくんっ♡どくどくっ♡びゅくんっ♡

「んっ♡んんっ♡んふうっ♡ぶあっ♡」《ああっ♡きたっ♡ドロドロのザーメンっ♡熱いっ♡》

口を開けて口の中の精液を見せてくる。こんなに可愛い王女の口の中が俺の精液でいっぱいになっている。ゾクゾクしてくる。

「まだまだおつきいですねっ♡んっ♡」《すごい勢いと濃さ…♡ちよっといっちやっかかも…♡》

そう言いながら俺を床に敷いたマットに押し倒して服を脱ぐ。綺麗な胸がぷるんっ♡と揺れる。

「それっ♡私結構得意なんですよ♡」《あ♡ちんぽの熱がおっぱいに直接♡》

ぎゅむっ♡と胸でちんこを挟む。柔らかくて弾力があって、何より出したばかりで敏感だからすごく気持ちいい。

「んっ♡んっ♡れろっ♡」《あんっ♡おっぱいとおちんぽ擦れ合っ♡て気持ちいい…♡》

敏感なちんこを容赦なく胸で扱き亀頭を舐めてくる。またいかされてしまいそうだ

「あ♡またいきそうですか?♡いいですよ♡私のおっぱいにびゅっ♡としてください♡」《またくるっ♡おっぱいに種付けされちゃうっ♡》

びゅぶっ♡どくんっ♡どびゅっ♡

「あんっ♡すごい♡濃いのがいっぱい♡」《おっぱいいっぱいぶっかけられてるっ♡熱いのいっぱい♡》

精液をローションがわりににちゅにちゅ♡音を立てながらしっかり搾り出してくれる。

「ん…♡おつきいまま…ですね…♡」《もう我慢出来ない♡おまんこに♡おまんこにちんぽほしい♡》

立ち上がってするする服を脱ぐ。綺麗な脚やまんこが丸見えだ。

「ほら…♡あなたのちんぽにご奉仕してたらこんなになっちゃいました…♡」《ちんぽ挿れたい♡はあ♡はあ♡おちんぽで♡おまんこずぼずぼ♡》

濡れまくったまんこを指で広げて見せつけてくる。当然応えるようにギンギンにそそり立つ。

「早く…♡早くおちんぽください…♡」《恥ずかしい♡さつき会ったばかりの人にお尻振っちゃってる♡》

四つん這いになってエロいお尻を此方に向けて振ってくる。飛びつくようにお尻を鷲掴みにしてまんこにちんこを擦り付ける。

「あ…♡いや♡切ないです♡早く挿れてくださいっ♡」《おまんこ疼いて我慢出来ない♡ちんぽ♡早く早くっ♡》

勢いよく腰を突き出して根元まで一気に挿れる。肉ヒダがにゆるにゆる絡みついてきて、肉壁はギチギチ締め付けてくる。気持ちいい。

腰を掴んで夢中で腰を振る。

「あはあっ♡きた♡ちんぽ♡ああんっ♡イイツ♡気持ちいいっ♡」《中でいっぱい擦れてる♡すごいっ♡深いところまで届いてくるっ♡》

ぱんっぱんっぱんっぱんっ

大きな音を立てながらお尻に腰を打ち付ける。すごい締め付けで取れてしまいそうなくらいだ。

「んはあっ♡すごいっ♡おちんぽすごいっ♡ひあっ♡しきゅーガンガン突いてるのおっ♡」《あっ♡しきゅー潰れちゃう♡またイクウツ♡》

なんてエロい声で鳴くんだ。興奮して無意識にペースを上げてしまふ。

「んぐっ♡だめだめっ♡今イってるからっ♡激しくしちゃっ♡つつお”っ♡」《イってる途中に♡そんな激しくっ♡いぎっ♡いっぢやうう♡》

ガクンツと大きく腰を震えさせてピクピクしている。少しやりすぎたか…？お尻を揉んでみる。

「んっ♡なに緩めてるんですか…♡もつと♡もつと突いてくださいっ♡」《今突かれたらおかしくなっちゃうのに♡もつとほしい♡気持ちいいのもつと♡》

大丈夫そうだ。安心してピストン再開。

「んぎっ♡あはっ♡ぎもちいつ♡あっ♡」(あああ♡ぎもち♡SEX きもちいよお♡》

ラストスパート。尻肉を掴んで思いつきり腰を振る。

「あっ♡はっ♡おちんぼビクビクしてますっ♡いいですっ♡このまま中に♡とろとろのしきゅーにザーメン注いでくださいっ♡」《あ♡くるっ♡中に♡まだイってるのにつ♡中にあっあっザーメンきちやうっ♡》

そんなこと言われてわざわざ外に出すわけがない。遠慮なく中に出すっ

どびゅっっ♡びゆるるるっ♡びゅーっ♡

「あ”あ”あ”あ”♡イグツ♡イグイグイグツ♡イツツ…♡グウウウツ♡あ”はあっ♡」《きたきたきたあっ♡ザーメンツ♡お腹の奥♡熱い♡おちんぼビクビクして必死にザーメン搾り出してる…♡》  
王女の中に思いつきり出してしまった…大丈夫だろうか…？ゆっくりちんこを引き抜きながらそう思った。

「すっごくよかったです…♡この島にきていろんな人とヤってる男の方って貴方だったんですね♡」《ああ…♡気持ちよかった…♡》

バレていた。というか情報が回るの早すぎないか？俺は少し焦った。

「大丈夫ですよ…♡誰も怒ったりしてないです♡むしろ自分はまだまだかと待ってますよ♡」

まんこをにゅぱあつと広げて精液を出しながら言った。安心した。

「まだ別の方ともしたいでしょう？♡私は一度満足しましたし、どうぞ♡」

本当はまだまだ物足りないけど…と聞いたげだったが、ビビの言う

通り俺はこの島の美女全員とやりたい。お礼を言つて服を着て部屋を出る。

相変わらず廊下が長い。玄関につき、外に出る。すると向かいの家の前にピンク髪の美女が立ってこっちを見ていた。



## 無敗の女編

ビビの家から出てすぐ、正面の家の前に立っているピンク髪の美女に手招きされた。

可愛くてスタイルも良かったので迷いなく近づく。

「ねえねえ、この島でいろんな女の子とやらしいことしてるの、貴方でしょ♡」

近づくや否や早速言い当てられた。ビビから聞いた話を思い出し、こくつと頷く。

「ふふっやっぱり♡じゃあ話は早いわ♡入って♡私はレベツカ♡よろしくね♡」

本当にみんな俺が自分のところに来るのを待っているようだ。喜んで家にかかる。

「ビビの家のベッドルーム遠かったでしょ。私の家は近いから安心して♡」

ビビとしていたのも当然バレている。そしてビビの家のベッドルームに行ったこともあるようだ。

「さあ、入って入って♡」

本当に近い。いろんな子を連れ込んでいるのだろうか。

「ほら、早く脱いで♡何日もシてなくて溜まってるの♡」

レベツカはばばつと服を脱いで下着姿になる。俺は上を脱いでしたのは脱がせてほしいと頼んだ。

「脱がせてほしい?♡ふふっ♡いいよ♡」

さつと脱がせてきた。びんつとちんこが跳ねる。

「あ…♡おっきい…♡ビクビクしてる♡」《硬くて熱い…♡すっごい振り返ってる…♡》

レベツカは竿を握って軽くしごきながらぺろつと舌舐めずりをした。

「いただきまあす♡んむう♡」《んふ♡口の中いっぱい♡美味し♡》  
「んっ♡んっ♡んむっ♡ひんぽお♡」《根元まで啜えると喉まできちやう♡すっごい♡》

舌で舐め回しながら吸い付いてくる。すごく気持ちいい。ビビとヤったばかりだから敏感でもういきそうだ。

「んんっ♡ぐぼっ♡じゅるるるっ♡」《あ♡ビクビクしてきた♡いきそうなのかな♡お口にいつぱいザーメンほしい♡》

吸い付きが強まる。もう限界だ

びゅくっ♡どぶっ♡どくんっ♡

「んんんっ♡んぶっ♡ふうんっ♡」《きたっ♡どろどろザーメン♡濃くっ♡おいひい♡》

ぼたぼたこぼしながら飲んでくれる。余計興奮してしまう。

「すごい量…♡飲みきれなかったよ…♡」《あ…♡喉に引っかかてる…♡》

溢れた精液で汚れた胸がエロくてついじつと見てしまう。胸で挟んでほしいと頼んでみる。

「ん？おっぱい？♡いいよ♡ほら、横になって♡」

簡単にOKしてくれた。見ているだけでもガチガチになるような胸で挟んでもらえる。

「んしよ…♡どうかな…♡上手くできてる？♡」《おちんぽ熱くて硬い…♡おっぱい焼けちやいそう…♡》

柔らかい胸で包まれて蕩けそう。すごく気持ちいい。

「ん♡んっ♡あっ♡」《擦れて気持ちいい♡激しくしちやお♡あっ♡》  
急に激しくなった。出したばかりなのにそんなに激しくされるともうでそうになってくる。

「んんっ♡おっぱいむにゅむにゅしてて気持ちいいでしょ♡ほらほらあっ♡」《あ♡ビクビクしてきた♡きて♡おっぱいにザーメンいっぱいかけて♡》

びゅるるるっ♡どくんっ♡びゅくっ♡

「きやつ♡あんっ♡ああっ♡熱いっ♡」《んんんっ♡おっぱいどころか顔にも飛んできてる♡変な匂い…♡でもたまらない♡》

出した後としっかり動いて搾ってくれる。気持ちいい。

「じゃあそろそろ…♡挿れて♡私もう我慢できない♡」《おちんぽしやぶったりしてただけなのにもうびしやびしや…♡早くおちんぽほし



「貴方この島中の人とやりたいんでしょ？♡だから、すぐ出なきやいけない♡」

俺は名残惜しいが首を縦に振った。

「んふふっ♡でも…もう少しここにいたいことになりそう♡」

レベツカはまんこから精液をぽつと出しながらそう言った。

俺は首を傾げた。レベツカに拘束でもされるのだろうか。悪くはない。

そんなことを考えていると、扉が開いた。

## レベツカ&ヴァイオレット編

レベツカにたっぷり搾られて少し休んでいると、ノックもなくドアが開いた。

V「はあ…♡はあ…♡」

ドレスをはだけさせた状態でヴァイオレットが息を荒げて立っていた。

R「ふふっ♡能力使つて見てたでしょ♡知ってるんだからね♡」

どうやら俺とレベツカがSEXしていたところを覗いていたらしい。そう思うと興奮してきた。

V「ずるいわよレベツカ…♡彼がいるなら私も呼びなさいよ♡」

R「だつてヴァイオラさん呼んだらおちんぽ独り占めしちゃうじゃない…♡」

なんとなく察した。俺はこれからこの2人と3Pできる。最高だ。話している2人のエロい身体を後ろからじろじろ眺める。いい眺めだ。

V「独り占めしないから…私も混ぜてちょうだい…♡指じや満足できないの…♡」《私とレベツカの身体を見てあんなに大きく…♡ちんぽ…♡ちんぽお…♡》

R「ん、いいよ♡私はさつきしたから先どーぞ♡」《ヴァイオラさんおちんぽガン見しちゃってる…♡雌の顔だ…♡》

ヴァイオレットが俺のちんぽをガン見している。2人の身体を見て無意識に勃ってしまった。少し恥ずかしい。

V「恥ずかしがらないで…♡少し前にたっぷりしてくれたじゃない♡」《ああ♡この距離でも匂う♡雄くさいちんぽ♡しやぶりたい♡しやぶりつくしたい♡》

ヴァイオレットがドレスを脱ぎ捨てて近づいてくる。下着は着ていないのか…相変わらずの痴女っぷりだ。

V「ほら…♡横になって♡」

指示通り仰向けに寝転がる。レベツカもにやにやしながら俺の隣に来た。

V「んあ…♡じゅるるるるっ♡んふっ♡んっ♡」《ああ♡口いっぱい♡ちゃんぽ♡好き♡このちゃんぽ好きなおっ♡》

R「ヴィオラさんのフェラどう？♡すごいでしょ♡」《うわあ…♡すごいフェラ…♡私もまたムラムラしてきちゃった…♡》

V「ぐぷっ♡じゅぷっ♡れるおっ♡」《すっごく硬い…♡レベツカとあんなにしたのに…♡気持ちいいのかしら♡》

R「ね♡私ともキスしよう♡ちゅっ♡れえ…♡」《我慢できない…♡おちんぽは譲っちゃったしキスだけでも♡》

V「ん♡ふう♡ぐぽっ♡ぐぽっ♡」《あ♡先っぽおつきくなってきた♡ザーメンくるっ♡熱いの♡くるうっ♡》

R「んっ♡ちゅう♡れるっ♡」《ヴィオラさんのフェラで限界なのにキス頑張ってる♡可愛い…♡》

びゅるるるるっ♡どくんっっ♡♡びゅーっ♡  
ヴァイオレットとフェラとレベツカの口内を蹂躪するようなキス。

たえられるはずがない。あっという間に射精させられてしまった。

V「んふうんんんっ♡んっ♡んっ♡」《きたああっ♡どろっどろの濃厚ザーメン♡美味しい…♡》

R「ん…♡ぶあ…♡私の時より早くない…？♡ちよつと妬いちやうかも…♡」《すっごい量…♡私もちよつと飲みたい…♡》

レベツカが俺の乳首をいじりながら言った。それはレベツカのキスがエロすぎるのもあるが…可愛いから黙っておいた。

V「ん…♡んあ…♡」《レベツカも飲みたいのね…♡仕方ないわね…♡》

R「いいのっ？♡やったっ♡ちゅう…♡ごっくっ♡」《あ…♡やっぱりすごい濃い…♡おいし…♡》

V「ん…♡ごっくっ♡んくっ♡」《あん…♡喉に絡みつくこの感じ…♡病みつきになっちゃう…♡》

王家の美女2人が目の前で互いに愛撫し合いながら俺の精液を喉を鳴らして飲んでいる。めちやくちや興奮する。その光景をオカズに、自ら軽く扱いてしまう。

V「ぶあ…♡あら…♡ふふふっ♡」《すっごい…♡まだおつきい…♡立

派なちゃんぽ…♡》

R「うわあ…♡すごい…♡」《そういえば男の人のオナニーなんて見たことなかったかも…♡あんなにして痛くないのかな…♡》

2人がこちらを向いた。俺は恥ずかしくてペースを落とす。

V「ん…？…♡どうしたの…？…♡ほら…遠慮しないで…♡」《もつと見たい♡あの人のオナニー♡見せられたい♡》

R「私達の身体を好き勝手に自分はオナニーも見せないなんてするいつ♡ちゃんとイクとこ見せて♡」

俺はそう言われて恥じらいを捨てた。2人の胸、くびれ、お尻、太もも、腋、全身舐めるように眺めてオカズにする。

V「ふふっ♡ほら♡貴方の好きな腋よ♡」《あの人の頭の中で私達めちゃくちゃにされちゃってる♡ああ♡すごい…♡》

R「ほらほら♡お尻ぱんぱんするの好きでしょ？…♡ふふふっ♡」  
ヴァイオレットは腕を上げて、腋をまんこを広げるように指で広げる。今すぐ舐め回したい…

レベツカも可愛い顔に似合わないえつろい尻を向けて自分で揉んで見せつけてくる。後でめちゃくちゃに犯してやる…

V「うふふっ♡可愛い表情♡いきそうなの？…♡いっぱい出してちようだい♡」《私達の身体をオカズにオナニー…♡妄想が伝わってきて興奮しちゃう♡あ♡2人にぶっかけようとしてる…♡》

R「ん♡いきそう？…♡いっぱい出して♡」《先っぽぱんぱん…♡出して♡出して♡》

2人がかりのえつろい誘惑に耐えられるはずもなくまたあつさりと出してしまふ

ぶびゅっ♡びゅくびゅくっ♡どぶっ♡

V「あんっ♡すごいわあ…♡すんっ♡すんっ♡はあ…♡」《あはあ…♡雄の匂い…♡くっさあ…♡》

R「あっ♡ははっ♡すごい…♡」《ん…♡この匂い…♡勝手に身体が発情しちゃう…♡》

俺はまだ息が荒い。それにちんこも硬いままだ。当然あの2人のせいだが。

V「ふふふっ♡そろそろSEXしたいみたいね…♡でももう少し待ってね♡」

R「もうちよつとだけご奉仕させてね♡そしたらいっぱい犯してくれていいから♡」

もう流石に挿れたいが、王族2人のハーレム奉仕など受けられる機会は二度とないだろう。大人しく受けよう。

V「あら♡レベツカ、また大きくなったんじゃない?」

R「ん、しよっ♡そうかな?♡まだヴィオラさんには敵わなそう♡」  
2人はお互いの胸を押し当て合うように俺のちんこを挟み込んだ。ハリのある胸と熟れた柔らかい胸が責め立ててくる。気持ちいい

V「うふふっ♡気持ちいいみたいでよかったわ♡ちゅっ♡」《おちんぽ熱い…♡おっぱいに直に伝わってくる♡》

R「ん♡上手にできてるかな?♡れるっ♡」《気持ち良さそうな顔…♡私も気持ちよくなってきちゃう♡》

2人とも競うように亀頭を舐めまわす。出したばかりなのにこんな極上の快楽…我慢なんてできない

V「あ♡もう出そうなの?♡私達のおっぱいにいっぱい出して♡」

R「きてっ♡ザーメンちようだい♡あっ♡」  
びゅくっっ♡びゅーっ♡どぶっ♡

V「ああんっ♡熱いつ♡はああっ♡」

R「あはあっ♡すごいすごいつ♡顔まで飛んできた♡」  
V「まだまだギンギンね…♡頭の中も真っピンク♡」《こんなに立派

なのでもうすぐ犯されるのね…♡ゾクゾクしちゃう…♡》

R「じゃあどつちと先にしたい?♡好きな方選んで♡」《何回も出してるのにすっごいおっきい…♡おまんこキュンキュンしちゃう…♡》

悩ましい。レベツカの若いキツいまんこもヴァイオレットの文字通りの肉壺も。俺は悩んだ末に、ヴァイオレットと先にすることにした。

V「うふふっ♡お先に♡」《ああ♡我慢できない♡早く♡ちんぽ♡ほしいっ♡》

R「むう…♡早く終わらせてね…♡」



V「じゃあ…♡ん…♡挿れて…?♡」《この体勢恥ずかしい…♡でも悪くないかも…♡》

ヴァイオレットはムチムチの尻をこちらに向けて振っている。望み通り一気に奥まで挿れる。

V「ん…♡あはああつ♡きたつ♡あんつ♡ふかあいつ♡」《これこれ♡このぶつといちんぽ欲しかったのおつ♡》

R「うわあ…♡いきなりすぎい…♡」《ん…♡我慢できないし指でしちゃお…♡》

V「ああんつ♡イイツ♡もつとつ♡もつと乱暴にしてえっ♡」

R「はあつ♡はあつ♡んんんつ♡」

ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡

ヴァイオレットの尻に腰を打ち付ける度、音と嬌声が響く。レベツカは我慢できずに俺とヴァイオレットがSEXしているのをオカズに、目の前でオナニーし始めた。

必然的にちんぽは余計バキバキになるしペースも早まる。

V「はああつ♡やはあつ♡きもちいい♡イツ…♡あはああつ♡」  
《すごいつ♡こんな早くイっちゃったの初めて♡もつと♡もつとイかせてほしい♡》

R「我慢してた後とはいえ…♡ヴィオラさんが簡単にイカされちゃった…♡んんんつ♡」《指じや全然奥まで届かない…♡ちんぽ…♡あのちんぽほしいよう…♡》

散々からかってきたレベツカが物欲しそうな顔をしている。俺は嗜虐心を煽られて、ヴァイオレットの腰を掴んで仰向けに寝転び、レベツカに繋がっているところを見せつける。

V「はあんつ♡いやつ♡レベツカに繋がっているとこ見られてるうっ♡」《やだ♡恥ずかしい♡けど…♡すっごくイイツ♡》

R「ああ…♡んんつ♡はーっ♡はーっ♡」《ヴィオラさんのに、ぶつといちんぽ入ってる…♡私もお…♡私もほしい♡》

ヴァイオレットが激しく腰を動かし始めた。レベツカもえろい水音を立てながら息を荒げている。刺激が強すぎる…

V「ああつ♡イキそうっ?♡いいわよっ♡中に♡思いつきりぶちま

けてえっ♡」《膨らんできた♡どろっどろの濃いザーメン♡思いつきりだしてえっ♡》

R「あっ♡早くっ♡早くイって♡私にも♡ちんぽおっ♡」《ちんぽまた太くなつた♡イキそうなんだ♡早く私にもシてっ♡おまんこシてえっ♡》

ここぞとばかりに締め付けが強くなる。一国の女王を孕ませる気で思いつきり中出しっ…

びゅっっ♡どくっ♡びゅくっ♡

V「あはあっ♡子宮熱いっ♡イク♡イクウウッ♡」《はああん♡ずっしり重いのが子宮に注がれてる♡イク♡中出しでイクウウッ♡》

R「イ、ク…♡はあん♡ん…♡」《イっちやっただけど…♡やっぱり全然足りない♡ああ♡中出し気持ち良さそう…♡》

肉壁がぐにぐにゆ動いて搾り取ってくる。抜くのは惜しいが、これ以上焦らすとレベツカが暴走しそうだ。ゆっくり引き抜いてヴァイオレットを横に寝かせる。

V「は、あ”んっ♡はあ、♡はあ♡」

R「ね、早くっ♡もう我慢できないっ♡早くちんぽちようだいよおっ♡」《出したばっかりなのにギンツギン♡すっごい絶倫ちんぽ♡早く♡私の子宮♡ちゅ♡ちゅしてえっ♡》

抜いてちんぽがあらわになった途端、レベツカがハート目で尻を振って誘惑してくる。完全に堕ちている。興奮を抑えられない。

ベッドを降りてレベツカの尻を鷲掴みにする。気遣う余裕はこちらにもなく、全く躊躇なく根元まで押し込む。

R「はあ、ん”…♡きたあ…♡ちんぽ♡ぶっつといちんぽお…♡」  
ヴァイオレットはお腹を摩って満足そうにしている。待たせた分しっかりとレベツカに集中してやろう。尻肉を掴む手に力が込もり、ピストンも強くなる。

R「ああっ♡イイ♡もつ♡もつと激しくうっ♡」《お尻ぎゅーっ♡ってされるの気持ちいい♡あ♡今子宮ごりってした…♡》  
ぐりゅうっ♡ごりっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡

1 突き毎に子宮に亀頭擦り付けてやる。その度に締まりがキツク

なって気持ちいい。いったばかりなのにどんどんペースを上げてしまふ。

R「んんんっ♡イイツ♡ちんぽすきいっ♡おくうっ♡おくごりごりしへえっ♡」《やばいっ♡すっごいエッチなこと言っちゃってる♡でも、もっとして欲しくてたまらないっ♡》

レベツカは快楽で呂律が回らなくなってきているようだ。俺も同じく、話そうとすればろくに話せないと思うが。

また精液が登ってきた。さらにペースを上げて、中に出すぞとアピールする。

R「んああっ♡きて♡中出しして♡くうっ♡イツクウツ♡」《ちんぽおつきくなった♡中出ししようとしてる♡孕まされちゃうっ♡》  
振り向いてじっと見つめながら中出しをねだってくる。望み通りたっぷり注ぎ込むっ

ぐ、びゅううっ♡びゆるるっ♡ぷう…♡

R「んひいっ♡キタキタッ♡ザーメンッ♡おほっ…♡あつつう…♡」《やだ♡すっごい下品な声出ちゃった…♡きつもちい…♡》

流石に少し疲れた。優しく抜いてからベッドにもたれかかるように床に座り込む。

R「はーっ♡は、あはっ♡んくっ♡」

今中出ししてやったばかりのレベツカが、体制を変えず尻を振って誘ってくる。体力はもう残り少ないが、精力はすぐ強制回復だ。

V「ねえ…♡私にももっどザーメン…♡ちようだい…♡?…♡」

ヴァイオレットがベッドの上から囁いてくる。2人揃って体力精力底なしだ。

俺はナミとロビンと3Pした時を思い出した。今回も同じかそれ以上の最高の状況。とことん楽しむことにした。

俺はヴァイオレットとレベツカを一晚中ハメ続け、全身精液塗れにしてやった。そしてあっという間に朝になってしまった。

V「やっぱりすっごいわね…私達2人ともそう簡単にイったりしないのよ…?…♡」

R 「まだしばらくこの島にいるんでしょう？よかつたらまたシてね  
♡」

2人と話しながら外へ出る。そしてまた次の女を探して周りを見  
渡す。

ナミとロビンとした時とあまり変わらないはずなのに、ちつとも萎  
えない：少し違和感を覚えるも、俺には好都合なので考えないことに  
した。

V 「ねえ、また別の子としたいんでしょう？じゃあ九蛇城に行ってみ  
たら？」

R 「あ、いいかも！あそこは可愛くて上手な人がたくさんいるし」  
九蛇城：聞いたことがあるような名前だ。とりあえず行ってみる  
ことにしよう。

V 「あれよ。大きくて目立つでしょ」

ヴァイオレットの指差す窓の向こうに、和風の大きな城がある。2  
人にお礼を言っって早速向かう。

R 「また遊んでねーっ！」

V 「ふふっ♡見かけたら襲っちゃうかもしれないけど：許してね  
♡」

## 九蛇の戦士編

2人の家を後にして歩いていくと、すぐに九蛇城に着いた。胸と股だけを布で隠すような格好をしている美女が何人もいる。

しかし今までの子達と違って弓を持って武装している。安易に声をかけていいものなのだろうか…

「ねえ、その貴方。見ない顔だけど…何者？」

金髪の美女がいち早く気付いて話しかけてきた。俺は「男が珍しい」「男に飢えている」というこの様の住人の特色を知っている。全て素直に話せばきつといい結果になる。

「男…なるほど、たしかにこれは女には見られない現象だな。」

攻撃されたりはしなかったものの、無意識に勃たせているのに気づかれた。服の上から慣れない手つきで撫でてくる。

今すぐ抱きしめたいところだが流石に危ない。なるべく興奮を隠しながら、今まで通り行為に誘う。

「ん…？つまりお前は何がしたいんだ？これが膨らんでいるのと同様があるのか？」

流石に率直にやらせてほしいとは言えないし、暗に示すような形で伝えたのだが全く分かってもらえなかった。

つまりこの美女は一切の性知識がない。男性器のことも「これ」と言った。

とんでもない上物だ。しかしどう誘えばいい。そのまま言ったところではわからないだろう。

悩んだ結果「腫れを引かせるための行為」ということにして、近くの森に連れ込むことにした。

「腫れを引かせる…たしかに私と会ってから腫れたのなら私が責任をとらなくちゃな。森に…？男も他人に股を見られるのは恥ずかしいのか。ちやうど交代の時間だし、付き合おう」

上手くいった。こんな美女の処女までもらえるなんて…楽園のよくな島だ。

「よし、ここなら誰にも見られないだろう。どうしたらいいのか教え

てくれ。」

その前にまず名前だ。名前も聞かずにやるのは流石に気が引ける。「そういえば名乗っていなかったな。私はマーガレット。よろしく。」彼女は軽く微笑みながら言った。マーガレット。短い金髪に胸と秘部だけ隠すような服装に抜群のスタイル。にやけてしまいそうだ。「それで、どうしたらいい？」

まずはズボンと下着を脱がせてから手で扱くように言う。

「わかった。ん、しょ……おお……熱い……それに硬くて……臭い……♡」

脱がせてすぐ、鼻をぴとつと当てて犬のように嗅いでくる。

「手で……こうか？」（なんだ……？こうしていると身体が……火照って……♡）

今までの女達と違い、テクニクはほぼない。全く経験がないのが伝わってくる。可愛い……

少し舐めてくれと指示してみる。流石に嫌がられるだろうか。

「舐める……わ、わかった。ん……♡れえ……♡」

ぎこちなく竿を舐め始める。あまりに可愛らしく、無意識に頭を撫でてしまう。

「んん……♡はむ……♡ぐぷ……♡」

なにも言っていないのに根元まで啜えだした。本物のまんこのようにきゆうきゆう締め付けてくる。

「んふ……♡こえは本え見たぞ……♡きもひいいか……♡」

啜え込んだままこちらを見つめて話しかけてくる。

喉の振動がそのまま伝わって気持ちいい。ドクツと脈打って、早くも精液が上ってきているのを伝える。

「ん♡ぐぽっ♡ぐぽっ♡じゅるるるっ♡」《何か上ってきた……なんだかわからないけど、このまま口に欲しい……♡》

初めてとは思えないえろいフェラ。たまらない……でるっ

びゅるるるッ♡どぶッ♡びゅうッ♡

「んふ、♡んんんっ♡」

「ぶあ……♡熱くてどろどろ……♡たくさん出たな……♡」《なにこれ……♡ちよつと苦いけど……クセになりそう……♡》

口を開けて、出したのをこちらに見せてから飲み込んだ。本当に知識がないのかと疑うほどのドスケベさだ。

「ん…まだ引かないな…さっきのをもつと出す必要があるのか？」

当然全く萎えない。元から生の女なら気絶するまで犯せるくらい自信はあったが、この島に来てから余計勃ちっぱなしな気がする。魅力的な女だらけのせいかな？

もつとだせば治るかと言えば全くそんな気はしないが、とりあえず領いて次は胸でしてほしいと頼んだ。

「胸で、どうしたらいいんだ？…なるほど、挟むのか…」

「ん、…♡こんな感じか…？♡」

柔らかい胸に肉棒が包み込まれた。動かないのに既に気持ちいい…

「ん♡なるほど…ちよつとわかってきたぞ…♡」

教える前から両乳を交互に縦に動かし、擦ってきた。処女でもSE Xのセンスはかなりのものだ。

「れえ…♡先っぽが気持ちいいのだろ…？♡んふ…♡」《あん…♡おっぱい、熱くなって…♡すごく…ゾクゾクする♡》

にちゅ…♡♡むにゅ…♡♡たぶん♡

いやらしい音を立てながらのパイズリに加え、鈴口をちろちろと舐めて亀頭を重点的に責めてくる。

「んあ…♡びくびくしてる…♡お前、中々可愛いな…♡」《先っぽ擦ると逃げるように跳ねる…♡男はここが弱いのか…？♡可愛いな…♡》

初めてとは思えないほどのパイフェラ。思わず情けない声を出してびくびくしてしまう。だが、可愛いと言われるのは少し悔しい…後でめちやくちやにイかせてやる…

「ん、♡先っぽ膨らんできたぞ…♡またさっきのが出そうか？♡んっ♡んっ♡」《またさっきのくる♡熱いの♡いっぱい♡》

射精感が高まった途端、それを感じ取ってさらに激しく責めてくる。なんてテクだ…もうでるっ

「んあっ♡あんっ♡おっぱいに、いっぱいでてるうっ♡」《きたっ♡

熱いの♡これ、好きいつ♡」

マーガレットの胸と顔は俺の精液でどろどろだ…マーガレットは頬の精液を指で掬い取って、その指をしゃぶる。

「ん…♡まだまだできそうだな…♡もつとこの熱いのをくれ…♡」《これ好き…♡もつとほしい♡いっぱい♡びゅーっしてほしい♡》

マーガレットは精液のことを「これ」と言い、もつとほしいとねだってきた。

この先も余裕でできそうだ。ついでに少し精液のことを教えてやる。

「ん…♡なるほど、このどろどろのはザーメン、というのだな…♡ザーメン、もつとほしい…♡どうしたらいい？また口でしてやろうか？」《ザーメン…♡口にするとお腹がきゅんっ♡てする…♡ザーメン…♡もつとお…♡》

蕩けた表情で可愛らしくねだってくる。可愛い…

さて、いよいよ本番だ。たっぷりSEXを教え込んでやろう。

「せつくす…♡私のまんこに…それを挿れるのか…♡」《あんなにおっきいのを私のまんこに…♡入るかな…♡》

頷いて少し触ってみるともう準備万端。ぐしよぐしよに濡れていた。

布の下は下着はつけていなかった。下着姿でうろついているようなものだが…女しかないとはいえ無防備すぎる

先っぽを押し当て、腰を掴んで 挿れるぞ、と一応念を押す。

「ん…♡いいぞ…、きて…♡」

ぐっ♡と腰を突き出してゆっくり挿入していく。こんな美女の処女、二度と味わえるものではない。

「あ、ぐ…♡んん…♡」《い、たい…けど、気持ちいいかも…♡まんこ、広げられてる…♡》

根元まで押し込むと、子宮にあたる。処女だけあって、今までの誰よりもギチギチに締め付けてくる。気持ちいい…

「ん、♡動いて、い…♡」

可愛らしい目で見つめながらそんなことを言われると、我慢できな



くなる。少しずつ強くしながら腰を振る。

ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡

「あっ♡あんっ♡あぁっ♡」

きつつい処女まんこに遠慮なく出し入れする。引くときも押すときもカ리가引つかかかってきもちいい

「や、あっ♡すごいっ♡セックスきもちいいっ♡」《1番奥、乱暴に突き上げられてるツ♡きもちいい♡頭ふわってする…ツ♡》

ただでさえ豊満な胸を腕で寄せて強調しながら可愛い声で喘ぐマーガレット：見下ろしながら腰を振っていると、どんどんペースが上がりてしまう

「は、あんっ♡あっ♡あっ♡んお、おっ♡ツ♡♡」《や、だめ♡どんどん激しくなってる…ツ♡腰勝手に浮いて、イクの止まんない…ツ♡下品な声出ちゃう…ツ♡》

可愛い嬌声に低くて下品な声が混ざり始める。綺麗な腹筋を痙攣させながらイキ続けて、まんこもきゅんきゅん締まる…っ

腰を掴んでいた手を離して、マーガレットの両手首を握る。顔の両隣に手を押さえつけて、組み伏せるような体勢で種付けピストンッ  
とちゅッ♡どちッ♡は、ちゅッ♡ぶち、うッ♡

「お、♡お♡はげ、ひッ♡出るのか、？♡ざーめん♡うッ♡このまま、中に…ツ♡♡」《あ、ああッ♡腰振りつよい…ツ♡すごいのは、キそおッ♡このまま、♡ザーメンほしい…ツ♡》

うるうるした目で見つめながら中出しおねだり、たまらない。必死に抑えていた精液が一気に上がってくる…ツ

とくッ♡びゅるるる…ツ♡びゅく、びくんッ♡

「あ、♡イク♡ザーメン注がれて、イクッ♡ううッ!!?♡♡」《お、おッ♡ザーメン、あつい…ツ♡勢いすご、♡イクイクイグ…ツ♡♡♡》

思い切り身体をのけ反らせて、全身を震わせながら本気アクメ…エロすぎる…ッ

こねるように胸を揉みながらしっかき出しきると、ゆっくり腰を引

いて抜いていく

「ん、はあ…♡♡すご…♡まだガツチガチ…♡」《あんなに出したのに、まだ腫れたまま…♡あんなに反り返って…♡》

マーガレットの視線はまだちんぽに釘付けだ…名残惜しいが、九蛇城にはきつともつと上玉の女がわんさかいる…！そう思うとじつとしていられない

ささつと服を着つつ、マーガレットに九蛇城のことを聞いてみる。なにせこの島に入つて初めて見た、兵に守られた場所だ。下手に近寄ると危険かもしれない。

「九蛇城に行きたいのか？ふくん…キミが何したいか、わかつてきちゃった…♡ふふ、私が案内してあげるよ♡」

さつきまで白目むいてイキまくってたとは思えない可愛い笑顔で答えてくれた。なんて優しい子なんだ…騙してヤツたことを少し後悔してしまいそうだ。

「では行こう、くれぐれも無礼のないようにな」

マーガレットはゆっくり立ち上がると、下着のような布の紐を結び直して言った。

俺はごくつと唾を飲み込み、マーガレットの後ろを歩く。

無礼のないように、か…王族でさえ街で普通に過ごしていたというのに、どんな身分の女が住んでいるんだ…緊張と期待を胸に、森を進んでいく。